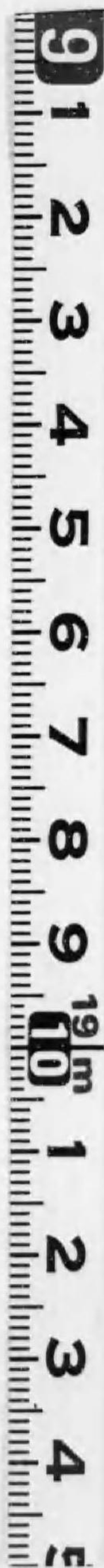


501

288

始



2H84

50/288

惑まどろみ心



徳田秋聲著

版大正  
11. 1. 30  
内交

次 目

別<sup>上</sup> 指<sup>若</sup> コ 見<sup>コ</sup>

い ツ 刷<sup>ツ</sup>

同<sup>ク</sup> 上<sup>れ</sup> 惑<sup>まどひ</sup>

上<sup>ぬ</sup>

れ 京<sup>環</sup> 志<sup>り</sup> 男<sup>男</sup>

.....

一〇四 八二 五八 三八 二〇 一



惑<sup>まどひ</sup>

次 目

男<sup>おとこ</sup> 少<sup>おとこ</sup> 束<sup>たば</sup> 同<sup>どう</sup> 敗<sup>たい</sup> 岐<sup>き</sup> 姉<sup>あね</sup> 熱<sup>あつ</sup> 悲<sup>かな</sup>

年<sup>とし</sup> 海<sup>うみ</sup> し

れ こ

の に き

心<sup>こころ</sup> 悲<sup>かなしみ</sup> 縛<sup>しば</sup> 棲<sup>せ</sup> ひ 道<sup>みち</sup> 弟<sup>おとうと</sup> て 旅<sup>たび</sup>

心 <sup>こころ</sup>	悲 <sup>かなしみ</sup>	縛 <sup>しば</sup>	棲 <sup>せ</sup>	ひ	道 <sup>みち</sup>	弟 <sup>おとうと</sup>	て	旅 <sup>たび</sup>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
四三一	四〇四	三八五	三六八	三五二	三三五	三〇八	二八九	二七四

次 目

稻<sup>いね</sup> 破<sup>やぶ</sup> 惱<sup>なご</sup> 暴<sup>あつ</sup> 母<sup>はは</sup> 稚<sup>ち</sup> 轉<sup>まわ</sup> 災<sup>わざ</sup> 去<sup>い</sup>

風<sup>かぜ</sup> こ 馴<sup>な</sup>

子<sup>こ</sup> 滅<sup>めつ</sup> み 雨<sup>あめ</sup> 子<sup>こ</sup> 染<sup>せん</sup> 地<sup>ち</sup> 禍<sup>わざ</sup> 就<sup>しゆ</sup>

子 <sup>こ</sup>	滅 <sup>めつ</sup>	み	雨 <sup>あめ</sup>	子 <sup>こ</sup>	染 <sup>せん</sup>	地 <sup>ち</sup>	禍 <sup>わざ</sup>	就 <sup>しゆ</sup>
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二五九	二四五	二一六	二〇三	一九九	一八〇	一六六	一五一	一三二

7228 (8)

惑



見馴れぬ男

徳田秋聲作

或日の午後、稻子は學校の歸りに、幾日ぶりかで、母の辰子を病院に訪ねて見た。病院は學校を出て橋を渡ると、直ぐ四五町のころに在つたが、稻子は學校のここが忙しいのに、此頃備ひのお婆さんが暇を取つて行つたので、食事の支度や洗濯や掃除なごで、小さいながら一軒の世帯をもつてゐる者には、こまなくした用事も可也多かつた。で、彼女は母に悪い

次 目

恩 愛 疎 母 自 弱 波

の と き  
離 れ も  
悦

怨	び	情	て	暴	の	瀾
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
五九四	五七〇	五四一	五三二	五〇八	四八〇	四五四

と思ひながら、つい歸りを急いで、學校の前から直ぐ電車に乗るのであつた。言ふまでもなく自分一人の時分には、寄宿にも入つてゐられるのであつたが、この頃は弟を一人預ることになつたので、爲方なし小さい家を一軒借りて、贅素な世帯をもつことにしたのであつた。

母の辰子は東京の病院へ來てから、もう餘程の目数になつてゐた。腹膜の手術が入院の目的で、その結果も豫期ごほり良好な方であつた。で、稻子も手術前後は、氣にかゝるので、幾んど毎日のやうに一寸でも顔を出してゐたのであつたが、一週間もたつと、疵も癒へ、元氣も段々出て來たので、漸と安心して、自然と足が遠くなつた。その上稻子は、餘り母を好いてゐるなかつた。

不斷考へてゐることや爲ることにも左右氣が合はないがちであつたが、眞實の母子らしい情愛に缺けてゐたのが、重なる原因であつた。そして其の情愛の薄いのも、二人が眞實の母子でないといふ、分明した意識を忘れるこゝが出来ないからであつた。

今も稻子は學校の前で友達と別れるとき、唯知つた人が入院してゐるからとばかりで、母を

見舞ふと云ふやうなことは、口へも出さなかつた。矜の高い彼女としては、母のことを口へ出すのも可慚しかつた。

で、彼女は友達と別れて、獨り病院の方へ歩いて行つた。時は三月の末で、外は春めいた明るい日影が麗かに流れてゐた。乾いた砂が、彼女の緩やかな靴の踵のあとから軽く揚がつて、弾みきつたやうな發育ざかりの體が、寧ろ重苦しいかと思はれるばかりに、のつし／＼と歩いて行つた。して、趣味のある豊かな癖のない髪を、學生風の無雑作な束髪に結つてゐるのだが、それにも若い生活力が、一筋々々漲つてゐるやうで、荒い矢絣の仙の振袖の八つ口からちらちら見ゆる白い二の腕の肌や頸脚が、この春先の日にも焦けずに、大理石のやうな潤澤をもつてゐた。

横町の靜かな通りへ入つて、二町ばかりも歩くに、そこが直ぐ病院の門の前であつた。門内には自動車も一臺見ゆ、腕車も二三臺供待をしてゐたが、その間を彼女は俯向き加減に歩いてやがて立關口で靴を上草履にはきかへて、二階へ上つて行つた。

辰子のあるのは、一等の八號室であつた。稻子は外光に馴れた目が、内へ入るに急に暗いやうな気がしたが、それも一つは暫く見ない母の病室へ入つて行くのが、何もなく鬱陶しいやうに思はれたからで、自分はずなせかう臆病に産れついたのでらうか云ふ気がした。

さんく、彼女が軽く戸を叩いてから、ちよつと間をおいて、淑かに取手を捻つて引いた。そして靜かに内へ入つた。

するに其の時に見馴れぬ男が一人、母の病床の側に椅子を占めてゐるのが、目に入つた。

『あら！』稻子はそれが如何な男であるかを見定める間もなく、何かなし悪いところへ入つて来たやうに感じて、思はず微聲に言ひ出した。そして其と同時に、顔が眞紅になつた。何につけても顔の紅くなるのが此年頃の女の常であつた。

二

病床の傍にゐる其の男は、一寸見たところでは、まだ四十には少し間のある年頃で、下町の商人にもつかず、それか言つて山の手の勤め人にも思はれぬ多少上品ぶつた意氣づくりの身装で、頭髪をハイカラに分けて、高い鼻に鼻眼鏡なまかけてゐるが、稻子の姿を見るに、今迄親しげに母の辰子と語してゐたのが、急に周章て苦走つたやうな大きな口元が引締つて来た目にも警戒的な色が現はれて来た。

それと同時に、稻子の入つて来たのには氣のつかなくつたらしい母の辰子も、その男の目の色や様子で、誰が入つて来たのださいふことを、反射的に直覺して、ふに此方を振顧いた。

するに入口の方では、稻子は何だか禁断の場所へでも入つて来たやうに心が咎めて、紅い顔をしながら、臆病らしく躊躇してゐるのであつた。無論咄嗟の場合で、その男が母の何んかにあたる人物だか、それにも全然他人なのか、そんな事は少しも考へる餘裕はなかつたが、何か悪いところを見たのではないか云ふ心配が、感じの敏い處女の頭に、直覺的に来たのであつた。

母の辰子は寝ながら白い腕を伸して、無造作に束ねた頭髮に觸つてゐたが、心持下つた目尻に小皺を寄せて微笑した。それも何もなく物怯のした不安けな微笑であつた。

「あゝ、稻子さんだつたんですか。もう學校がお済みになつて？」辰子は訊ねた。

「わ。稻子は其の言葉に釣られたやうに、靜かに傍へ寄つて行つたが、その男の方へは、なぜか挨拶する氣にもなれないで、見て見ぬ振をしてゐた。

するゝ其の男も、一ト方ならず困惑した風で、今までしてゐた話を急に止めて、罰がわるさうに金紗縮面の兵兒帶のあひだから、金時計を引出して、ちよいと時間を見てゐたが、悪れた様子もなかつた。

「ではまあお大事になさいんし」男はさう言つて、衣紋をつくろひながら、椅子を離れた。

「然うですか。では……さうも有難うございました」辰子も用心深さうな、その癖何事も打開けるやうな心易けな調子で應へた。

やがて男は病床を離れて、此方側へやつて來た。そして、「さあ萬望！」と微笑で辰子に挨拶した。

で、稻子も其につれて、一寸黙禮した。するゝ其の拍子に、男も其儘には出難かつた。見えて少し口を利いた。

「お嬢さんで在つしやいますか？」

そして彼は辰子と稻子の顔を等分に見た。

「は、これが私どもの總知ですよ。」辰子はやつぱり微笑をたゞねながら言つた。

「は。さいで在つしやいますか。お幾歳でいらつしやいますか？」

「幾歳でしたつけね」辰子は稻子の顔を眺めたが、稻子は顔を紅くして、微に笑つたきりで、返辭もしなかつた。

「こんなお嬢さんがお有りでは。お楽しみですか」男は世辭笑ひをした。

「は。もう學校も今年でお終ひですから……。辰子も嬉しげに顔を崩した。



「それは結構ですわね、ではもうお嫁入りの御支度ですな。」  
「何ですか、本人にはまだそんな氣持ちもないやうですけれど……。」  
「いづれ立派な候補者が澤山ございませう。男はさう言つてそこにあつた中折を取あけるに  
では御免下さい」……二人に會釋して室外へ出て行つた。

三

稻子は初めて辰子の傍へ寄つて、  
「さうも御無沙汰しました。あれから段々お宜しい方ですか。」「見舞の辭を述べた。  
「有難う」辰子は少し起き上つて  
「お蔭で追々快い方なのよ。それにもう徐々散歩もできますから、此分なら追つ着け退院がで  
きるでせうよ。」  
「さう。それは可うございましたね。」稻子は辰子の顔を眺めて。

「この前伺つた時よりかも。お顔の色が大變に好くなつてよ。」  
「然うですか。」「辰子は淋しげな微笑を淫べて、  
「眞實に色々お世話になりましたね。正一は何うしてゐます？」  
「正ちゃんですか、不尙變ですわ、今日も私が病院へ行くと言つたら、早く歸つてくれと言つ  
てゐましたつけが、あれもお母さまの病氣は心配だつたさみねて、一時は随分氣にかけてゐ  
ましたよ。」  
「ふッ」辰子は笑つたが「其癖お見舞にはちつとも來て呉ないよ。あの子は薄情かも知れな  
いのよ。」  
「い、わ、そんな事はないのよ」……、稻子は打消したが、正一が近頃産みの母の辰子に對して  
何か知ら有き足りないやうな様子のあることは辰子にも感づけることでもあつた。  
まさか辰子の素性を聞き知つて、いくらか侮蔑の念が起つたこと云ふ譯でもあるまいか、餘り  
親しみを感じてゐないことは事實であつた。

「それに此の病院は、婦人科の専門で、来るものも来る者も女ばかりだから、僕は行かないなんて其様なことを言つてゐましたわ。」

稻子はわざと取繕ふやうに言つた。稻子も。義理のある此の母を。心から尊敬もしてゐなかつた。素姓や産れが何であらう。そんなことを彼此思ふ譯ではなかつた。人情が薄い。か腹が悪い。か云ふのでもなかつたが。たゞ近村一圓の人達から尊敬と信用を受けてゐる徳望家の蓮沼の夫人としては。品格や思慮や智識や趣味や。それ等總ての人格に於て。物足りない者が可也多かつた。誰が言ふこともなく。三子が東京のカフェの女給仕であつた。か。料理屋の女中であつた。か云ふやうな噂が。この朴な村にも擴がつてゐて、稻子がまだ村の小學に入る時分。そんな事を言つて聞かせる物好きな女房もあつた。

それを耳にしてから。稻子は今まで子供心にたゞ莫然と感じてゐた。か。こゝが遽に判明して來たやうに思はれて。繼母に對する敬愛の念が不智不識薄くくのを感じた。今でこそ馴れてしまつたが。それを聞かされた當時は。單純な少女心に。この上ない侮辱を感じて、悲しさも口惜し

さで。胸が一杯になつて了つた。今迄自分の家庭ほご。自分の父ほご。尊嚴で崇高で平和なものはないに信じてゐたのに、母の前生活が、そんなにも賤しいものだ。か云ふことを知つてから遽に其の信念が突崩されて、父に對して深い疑惡の念さへ起つて來た。

それに正一はもう十六になつてゐた。自分の母の過去を、何かの機會に村の誰からか聞かされてゐるに決つてゐるのであつた。聞かされないまでも母の言語動作なごでそれを感づかないでゐられないのであつた。

稻子は正一から、一度もそんな話を聞いた。か。こゝもなかつた。自分からも夫だけは。か。にも出さなかつた。けれど正一が、この頃特にも姉の自分に親しみ。か。愛執を感じて來たに引換へて、母の哀子に疎々しくなつた。か。こゝは、争はれない事實であつた。

それだけの事を腹に疊んで、稻子は長子を慰めやうとしてゐた。

暫くしてから 稻子は懐ろから一通の手紙を取出して、

『それはさうご。お父さまからお手紙が来ましたのよ』とそれを寢臺の端においた。

『おや、さう！』と、辰子はちよいと手に取あげたが、何故か厭な顔をして、開けて見やうともしなかつた。そして「何といつて来ました？」と不安の色を浮かべながら訊いた。

一體なら辰子に關する用事は、病院の方へ寄越して介意はない譯なのだが。辰子が餘り讀書きのできる方でもないので、返辭を書くのが臆却でならなかつた。で、手紙は大抵稻子の目こ手を経るここになつてゐるのであつたが、其がまた辰子には此上もない不便でもあり、不安でもあつた。

稻子は中實を出して、何時ものとはり要點だけを低聲で読んで聞かせたが、用事云ふのはもう徐徐退院の時期であらうが、事によつたら花見がてら其頃ちよつと自分が出向いても可い

然し途中別に案じるこももないやうなら、獨りで歸るこもにしては如何か。田舎も日増しに暖かくなる、自宅診察や住診も忙しくなつたから、實は餘り家をあけたくはない。と云ふやうな至極當り前の用事で、その他には送金のこも、村の最近の出來事などが書加へてあつた。そして三百圓の爲替が奥に捲き込んであつた。

稻子は手紙を読んでしまふと、その爲替券だけを取つて母に手渡しした。

『このうちで、私達二人の今月の生活費を支出するやうに、其も別の紙片に書いてあるんですの。』

『さう！』と、○子は別紙の追而書き、其の爲替券を手に取つて打眺めてゐた。そして腹のなかで何か計算してゐるらしかつた。

『二人の生活費を差引くと、三百圓ぢや歸られないかも知れないわね。』辰子は暫くしてから吐いた。

そして爲替券を寢臺の上へ落した。

稻子は別に何とも言はなかつた。

大分間をおいてから辰子は眉根をしかめて『それに私退院しても當分東京にゐて病院通ひをしなければならぬかも知れないのよ。院長さんのお話では、私の病氣は腹膜ばかりぢやないんです。』

『他にも病氣があるんです？』

『わゝ、大有りなの。』

『ごころがお悪いんでせう。』

『神経衰弱もあるし。婦人病もあるから、今のうち癒しておかないと、大事になるかも知れないんです。』

『まあ！因りましたわね。』

『それでお父さんには、何とも濟まないけれど、私當分東京にゐるやうかと思ふのよ。もう十五年もあの寂しい山の中にあるて、おまけにお百姓や病人ばかり相手にしていつ浮々き氣が

晴れたといふごころもなければ、面白いと思つたごころはないんだもの、それあ病氣にもなるやだわ。』

『ほんごうに母さまには、お氣の毒なのよ。東京で暮した人は、それは何うしたつて田舎の暮しは相應ひませんわ。』

『わけても私はさうなんですよ。』辰子は少し調子づいて。

『ごうせ田舎のごころだから、面白いごころのあらう筈はないとは思つてゐましたの。その位の覺悟はしてゐましたの。だけれど正可あんな山ばかりの、田圃中の一軒家だとも思はなかつたの處がごうでせう。裏へ出てみるご、四方八方山ばかりで、それが十一月になるごもう雪でせう。その雪がまた來年の四月……ごころか、奥の方なぞ、七月になつても、まだ眞白なんでせう。まあ、行つた當座のあの一ト冬の心細かつたごころ。何處を見ても雪ばかりで青いものなんごいつたら、てんで無いんだもの。これあ迎も人間の住むごころぢやないと思つたわ。』

『然うですかね。』稻子は薄笑ひをした。

それに東京も、私下町にゐましたからね。」辰子はさう言つて、ちよつこ目眩さうな目容をした。彼女は自分の閱歴も餘り人に程れないこは思つてゐたけれど、然しまた内心そんなこころが得意でもあつた。で、一つ調子に乗るこ、随分料理屋の話なごを爲兼ねないのであつた。

「ね。然うですね」こ、稲子は程よく應答へをしてゐた。

「ですから私あすこには、逆も辛捧しきれないから、お暇を戴かうこ思つたこころが、何遍あつたか知れないの。でも不思議なものぢやありませんかね、正一こいふ子供があつたばかりになつたついでかされて。十六年こいふものあの山のなかに埋もれてゐたんですからね。」

「ね、さうね。」

「私のやうなものでも、矢つ張子供は可愛いんですわね。出るなら正一は男の子だからおいてゆけと言はれるとつい氣弱く子つて、辛捧する氣になるんですよ。その代り私は悉皆田舎もの

になつてしまつたと思ひますよ。」

「そんなことないわ。」稲子は笑つて

「ちつとも田舎風ぢやありませんわ。」

「然うでもありませんよ。第一言葉が田舎風になつてしまつたわ。今も私あの人に笑はれてゐた處なの。」

「然うですかね。あの人は何なの？」稲子は無邪氣調子で訊た

辰子は惱ましけな目色をして、ちつよと後悔した風であつたが、

「あれ？」と、軽く反問して、「あれはね、以前私のゐた家のコックだつたの。眞實のこころをお話しますわ、稲ちゃんだけにはね、誰にも言つてくれちや困るのよ。」

「ね、言はないわ。」

「そのコックが何うでせう、旦那が死んでからお上さんとの仲がよくなつて、到頭帳場へ坐りこんで了つたの、運の好い男なのよ。」

『さう！』と稻子は頷いた。

『あれ幾歳だと思つて？』

『さうですね五十くらゐ。』

可愛さうに！』と、辰子は酔つぱいやうな聲面をして、『頭こそ禿てるるけれど、あれでも未だ漸う四十になつたかならないくらゐなのよ。』

稻子は五十歩百歩だと思ふた。四十も五十も若い彼女の目には一般に老人と思はれてゐるたからである。

『それに感心なことには、あゝ見ても大變に親切氣のある男なのよ。』辰子は人の好ささうな目尻に皺を寄せて微笑したがふと氣をかへて、『さう／＼稻子さんは、こんな話は禁物だつたのね。貴女は何でもハイカラなお上品などが好いんだから。』

『然ういふ譯でもないわ。』稻子は口元でにつと笑つたが、帶の間の時計をちよつと摘み出して見て、

『私もお暇してもいいでせう。』

『わ、さうぞ。』

『それでお父さまにお返辭を出さうと思ひますけれど……』と、相談をしかけるやな風に言つた。

『さうね』と、辰子は遽に顔色が曇つた。『私何うでも可いけれど……何だか厭だな、又あの山の中へ歸つて行くのだと思ふと。』

『でも偽方がないでせう。』

『では何うしやうか知ら。後一週間もゐるとにして、他の病氣はまた出て来る折のあつた時に療治をすることにしませかね。』

『わ、でも其れはお母さんの御隨意に……。』稻子は強いて自分の考へを述べやともしなかつた。』

## コックが上り

その翌日も、コック上りの西洋料理屋、ときや亭の沼田壯吉は、同じやうな時刻に辰子の病室を見舞つた。彼は来る度に、何か知ら辰子の好きなやうな物をもつて来てくれたが、菓子を焼いたからと云つて、病人の口に適ひさうな軽いケーキを少しばかり堤て来た。

沼田も辰子も、若い時分は新橋の方の同一西洋料理にゐて、彼はその時分から横濱で西洋人に就いたと云ふ、一寸腕利きのコックであつたし、辰子はまだ十八九で女給仕をしてゐた。

辰子とても、素性は強ち賤しいものでもなかつた。父は靈岸島の方に酒屋をしてゐたが辰子の母が死んだ頃から、身持が崩れて家業を怠り、さ下の藝者に弱れて、終にそれを家へ入れたりなごして、すつかり家が傾いてしまつた。そして其を挽回さうとして焦心つて相揚なごに

手を出してから、一層收拾がつかないことになつてしまつた。で、彼はその女とも別れて、淺草の裏町へ逼塞したが、辰子の母方の親類の厄介になつて病死してしまつた。

辰子が新橋のレストオランにゐたのは、ちようご其の前後で、沼田とも朝晩に顔を合して浮いた笑談口なぞ利き合つた間であつた。

すると或る年の秋の初めのこゝで、體の町也丈夫、あつたは辰子の乳のあたりに悪性の腫物ができて、築地の或病院で診察を受けた。それは瘍の類であつたが、若手の醫學士がそれを切つてくれた。醫學士の名は渡瀬三云つたが、それが縁となつて、彼は時々飲み食ひをした彼女の給仕に出てゐるレストオランへ行つた。二人は互に惹着けられて行つた。無論そんな場合、一人や二人の戀の競争者のあつたことはなごんな平凡な女にも、この種類の女には有勝のこと、辰子の愛を得やうとした男は外にもあつた。コックの沼田も斯の一人であつた。銀座の若い商店員で、せつせと缺かさず店を仕舞つてから飲み食ひに来る男もあつた。

辰子の好きなのは何方かといへば商人であつた。コックでも醫者でもなかつた。で、三人のう

ちでは其の若い店員の方に多く心が動いたが、それがコック場なごで餘り噂が高くなつたので沼田の憤怒を買つてしまつたのみならず、傍の女給仕の口も煩かつたので、そこを暇を取ると同時に、築地の方の或日本料理屋へ住替をすることになつてしまつてから、急に渡瀬との交渉が繁くなつた。渡瀬と辰子とは、年が十ばかりも違つてゐたが、彼の父の死によつて、急に田舎の家を嗣ぐことになつて、東京を隔れる頃には、彼女は長くもそんな家に働いてゐられない體になつてゐた。

で、彼女はまた眞實にそこに居坐る決心もつかないで、渡瀬に説き諭されて、一緒に田舎へ引込むことになつたのであつたが、それがちやうど眞冬のことと、雪の深い山國の村落にある彼の家へ入つて行つた時には、今にも逃出さうかと思つたくらゐであつた。

けれど彼女にも母の愛はあつた。産れた子が男だと云ふことが、一層彼女の心を現在の境遇に惹着けた。それを振すて、其處を出ることは、彼女には迎も出来さうもなかつた。で、彼女は餘議なく周圍の生活に段々同化されて行つた。そして單調なしかし可也人の口の煩い田舎の

生活を謝忍びつゝ、一年二年とたつうちに、東京へ出てまた働くには、氣持が餘りに母親じみたやうにも思へたし、自分の年も考へてみなければならぬやうな氣がした。彼女は溜息を吐きながら、土地に信望のある家柄の令夫人として、幅の利くのも厭ではなかつたので、三年五年と自分の運命に引かれて行つた。

二

で、その日も、沼田は過去つた日の話をして、辰子を悦ばせる氣で、彼女の病床を音づれたのであつたが、辰子はもう寝切りでもゐないほご快くなつてゐた。殊にその日は久振で髪なごも綺麗に結つて、寢衣の上にお召の羽織を引かけて、着物の入つてゐる箆笥の抽斗を整理してゐた。

『そろ／＼退院の時期が近づきましたから、荷物でも作つておかうと思ひましてね。辰子はさう言つて笑つてゐた。



處が沼田の方では、辰子が長いこと病院にゐて、何うやら田舎へ歸つて行くのが、厭になつてゐることを十分感づいてゐるので、わざと澄ました風をしてゐた。

『多分そんな事だらうと思つてゐました。では又當分お目にかゝれませんな。』

『わ、もう、今度歸れば又何時出て來られるか。沼田さんの處へも、一日行つて遊ばしてもらはうと思つたけれど、其れも止めです。』

『然うですか。』沼田は少し驚いたやうな表情をして、

『しかし折角お出でになつたのですから切めて私の店へだけでも來て下さい。この間もお話したとほり、店も私のものになつてから、方々手を入れました、見違へるほご立派になりましたよ。五十人六十人の宴會も何時でも引請られるやうに、設備もしました。で、仕合せなごに昔から私の料理を好いて下さる方もございますので……就も洋食も一ト頃から見るご滅切面目を改めました、それ一つは時代の進歩でして、お客さまの口が一體に奢つて來た證據でございますよ。』

彼はそんな話をしてそれから夫へ店自慢をしてゐた。

『然うですかね』辰子は窓きわへ來て椅子に腰をかけたが沼田が何のくらの自分の出世を有難がつてゐるのかご可笑くなつた。

『で、御退院になるごすると、何時頃お歸りですか。』

『それも然う遠いことぢやないの、何しろ私は田舎へ引込んでから、それでも博覽會のをり一度東京へ來たきり、何處へも出ないんですからね、渡瀬という人が又私を出すのが大嫌ひなんです。其癖自分にはちよいと東京へ來る癖に。』

『旦那はもうお歳年にお成んなさいます。』

『もうお爺さんですよ。私には十二も違ふんですからね。』

『それあ仕方がございませぬよ。貴女は旦那には二番目の奥様ですから。何しろ、あんな大きいお嬢さんがお有りになるんでございませぬからな。あのお嬢さんも今一二年たつと、貴女の御

姉妹としか思へませんよ。』

『然うでせう。あの人は何うしてあんなに大きいんでせう。私あの人の傍へ来られると何だか頭から壓迫へつけられるやうな気がするのよ。』辰子は顔を擡めて

『ここに居ても、始終あの人に監視でもされてゐるやうな氣持で……實際またあの人は、大きくなつてから、悉皆様子が落着いて来ましたからね。それで口が重くて、底氣味の悪くなるほどむつつりしてゐて、いつ氣爽に打釋けて話をするこいふこゝがないの。』

沼田は人の語はしみく聞いてもゐない風で突然に、

『で、貴女のお子さんが無論渡瀬の家を御相續なさるんでございませうな。』

『さあ、それも今から考へておかなくちやならないんだだけれど、巧く行くか何うだか、其時になつて見なければ判らないの。』

『けさ男のお子さんは一人きりでございませう。』

『こころがあの稲子に幼い自分から許婚のやうな男が一人おられますのよ。是も醫者で、現

に東京にゐますの。』

『はは、成程!』こゝ、沼田は金齒の口をほかんこ開いて

『それだ其で貴女も苦勞があるんだ。よく出来てゐるものですな。』

三

『ぢや何ですな、奥さんに男のお子さんが有りながら、財産を貰ふといふ譯でもないですかいそれぢや話らんぢやございせんか。』

沼田は額を撫あけながら言つた。

『は、然うですとも。』辰子は空虚な聲で應へて、

『尤も幾分かは分けてもらへるでせうがね、然々然う大して有る譯ぢやないんですからね。』失禮でございますが、餘つ程お有りでせう。』

沼田は恍けた目をした。

「いゝね、幾許もないでせうよ。」辰子は首を傾けたが、

「あの人が十年間も東京へ修業に出てゐる間に大分費つたやうですからね。田地や家宅、色々ものを合せても、高々二萬が三萬、逆も五萬は無いさうですよ。」

「あ、それぢや」ミ、沼田も首を傾けて

「奥さんの前ですけれど、いくら田舎でも其ぢや食ひ贅澤もできませんね。」

「ね、然うですとも。」辰子は極悪さうに應へた。

「失禮な申分ですけれど、今時の二萬や三萬は財産のうちへも入らない位の者でございますから、其れも御總このお嬢さんが大部分お取りになるミすれば、餘は情々一萬位のもので……少し油断をすれば無くなると云ふ勘定で。」

辰子は今迄にも、こんな事は考へないでもなかつたが、沼田に言はれて見るミ、其れが一層適當に判つて來たやうで、何だか急に肩身が狭いやうな氣がした。それに良人の年齢を考へると、尙更前途が心細かつた。放心してはゐられないと云ふ氣がした。

「然し其れはそれとして、一つ私の處へ來て見て下さいませんか。私も大して好い身分といふ譯でもありませんが、今店を仕舞つたところで、一生大きな家に住まつて、随分贅澤にやつても、元へ手がつくと云ふ心配はまあない積りでしてあの店だけでも、四萬や五萬なら何時でも買ひ手がつくのです、いづれ年を取つたら、商賣は止めて氣樂に暮すつもりですが、今廢すのは些と惜い。まあ五十過ぎまでは働くつもりですが、何にそれも氣樂なもので、此頃まるで毎日遊んでゐるやうなものです。で、御存じのとほり、酒なら少々づつはやりますが、女道樂はなし、係累もございませぬ。まあ毎年夏になると、伊香保か函嶺へでも行つて、暑いうち二十日ばかり遊ぶくらゐのもので……。」

「如い身分だわ。」辰子はうつとりした目をして、溜息をついた。

「處が餘り獨法師でも、人間はつまらないもので、これと云ふ苦勞がないから返つて怠蕩をします。まあ、酒を飲むと云つたところで、お飲はなし、旅に出るにしてからが、たゞ勃然と獨り汽車に乗つてゐるたんぢや、話相手がなくて、根つから面白くもありません。」

「それも然うね、獨り持つたら何う？」辰子は色つほい目で、ちよつと彼を見遣つた。

「そんな事を云つてくれる人もありますがな、私あ是で妙な性分で、やつぱり誰でもと云ふ譯にやいかない。藝者も偶にや遊んでみたこともありますが、此方で些とは好いと思ふのは、向ふでいけず、なか／＼無いものです。それにや店のことも觸るものでなくちやあ可けず。餘り若くても困る、年を取り過ぎてても可笑しい。難しいものでさ。」

「さう又喧ましく言た日にはね。」

「格別さうでもないんですがな、然し貫ふくらるなら矢張氣に入つたのが可うございます。」

「それあ然うですとも。それにお金はあるし、子供がある譯ぢやなし。」

辰子は惱ましけな表情をして、沈んだ聲で云つた。

「いや飛んだ詰らんお話で……」と、沼田は急に氣をかへて、

「これは別のお話ですが、近いうち昔馴染同志で一つ何處かへ遊びに行かうぢやございませんか。」

#### 四

「さうね。結構だわ」ぎ、辰子は瑞々した目に笑を含んで答へた。

「いや眞實に！」と、沼田は目を丸くして、「それも東京うちは興がないから、函嶺のあたりへお件をしたもので……。」

「尙結構だわ。だけれど止めておきませう。あのお嬢さんが、病人の癖に其處いら遊びまはつてゐるなんて、田舎へ告げ口をされても困りますから。」

「は、成程！」沼田は目をぱちつかせた。

「私も折角久し振で来たものですから、實は退院したら、芝居の一つも見たり、お美しいものも食べたり、少しは買ひたいものもありますから、十日もゐて東京見物でもして遊んで行きたいと思つてゐるんですけれぎ、家ではそんなお察しがありませんから、退院も精精早く、院したら直ぐ歸れ、事によつたら迎ひに行きませう言ふので、もう煩く手紙を寄越しますの。」

「おや／＼、」沼田は顔を擧めた。

「何うして又そんなに喧しく言つてお寄越しになるのです。それぢや全然病院の御飯を食へに來たやうなもんですな。」

「は、田舎はみんな然うなんですの。それに此頃看護婦が一人ゐるきりで、手がありませんからね。」

「奥さんもなか／＼お樂ぢやありませんな。」

「それで其癖、これと云ふ用事もないんですの。たゞ一日何だ彼だご云つて下らなく動いてゐなけりやならないんです閑で困つてゐる村の人が來ればお酒を出すとか何處そこの隠居が油を賣りに來れば、又其のお相手もしなければならぬし、やれ鶏が裏の野菜畑を荒すだの、やれ葡萄に蟲がついたのと、それには夫々備ひ人もゐますけれど、田舎に暮す以上は、やつぱり養蠶のこと知らなけあならないし、偶には田植の手傳ひもして見て、田園趣味だとかも心得ておく方が樂しみだとか言つて、宅が煩く言ふものですからね。」

「それは其に違ひない。」

「だつて東京に住馴れたものに、田園趣味も何にもあつたものぢやありませんよ。」

辰子は笑つて「まあ、此頃それでも、いくらか馴れましたからそんなでもありませんけれど行つた當時の寂しかつた事つたらありやしませんでした。話相手はなし、見るものはなし、お化粧をすれば近所から悪く言はれる。軟いものを引張れば、目に立つていけないと言はれるその上瓦斯がないから、何一つ養るにも大きな圍る裏に粗朶をくべて騒ぎで、あの煙だけだつて、好い加減熏しがかゝつて了ひますよ。それも此頃漸くいくらか人間らしい氣持がしますけれど、冬と來たら其こそ爲様かないんですの。寒が強くて、雪が降つて、そこから其處へも出られやしないから、何のことない穴のなかの罷か、離れ島へ流された罪人です。」

「成程ね」と、沼田は感嘆の聲を立てた。

「この間も、稻子に言つたんですけれど。私何の因果で、こんな山の中で一生暮さなけあならないのかと思ふと、泣きたくなることありますよ。あゝ。爲様がないと思つて、山を眺めち

や溜息ついてるんですよ。』

『まあ爲方がありませんや、渡瀬の旦那に惹かされたんだから。』

『それもお義理でね。あの人が親切に言ってくれたから。ですが私は瞞されたんですね。』

『然うでもありませんまいが、一つは習慣でさ。田舎は。氣でいゝつて言ふ人もあれば、反つて

人の口が煩いと云ふ人もあると云ふ譯で……。』

『眞實に田舎の人ほど、寄ると觸るゝ人の悪口を言ひますよ。それ言ふのも、世間が狭くて

外に爲るゝところがないから……。』

## 五

そんな話をしてゐるうちに、大分時が移つて、廻診時刻になつた。で、沼田はそのうち一日だけ何處かへ遊に行ひきたいから一兩日うちに電話で都合を聞かしてくれと頼んで、歸つて行つた。

辰子は初めて此男が病院へ見舞ひに来たとき、何だか變な氣持がした。自分の昔の洋食店が何うなつたかと、實はそれが知りたくて、創が癒れて糸を引いてから間もなく、電話をかけて訊いてみたのが因縁になつて、彼は早速訪ねて来てくれたのであつたが、以前の關係が關係なので、心が痛んだ。しかしそれも二度三度となつて、昔の親しみが出て来るこゝ、もう馴れてしまつて、彼の來ない日は寧ろ物足りないやうな氣がした。無論辰子は、淺草に叔母が一人居るきりで外に身寄もなかつたので、稻子や正一の來ない日は、陰氣な病室に獨りゐるのが、寂しくて爲方がなかつた。彼女は日に／＼沼田の來るのを待つやうになつた。處で、今日の診察で、醫師は二三日うちには退院しても可い云ふのであつた。

『大分長くなりましたな。もう大丈夫です。尤も外に婦人病がないこゝもありませんが格別心配するほどでもありませんから、一先づお歸りになつた方が宜しいでせう。』醫師はそつといふ風に言つてくれた。

『有難うございます。お蔭さまで……。』

辰子は退院の日の來るのが、嬉しいやうでもあり、又残り惜しいやうな氣もしたが、それは強ち沼田に何うの憊うの云ふ意味ではなかつた。無論沼田がああのレストランの主人になつてゐるご知つて、些こ變な氣持もしないごはなかつた。そんな幸運がああの方に對してゐるご知つたら、もつご何ごか爲様もあつたらうに云ふ氣もしたが、然しそれよりも唯東京を離れて、再びああ寂しい山の中に引込むのが厭でならなかつた。

で、辰子はふご思ひついたやうに、退院後に訊いた。

『然し先生、如何でございませう。退院後直に家へ歸りまして可うございませうか。其ごも暫らく何處ぞ温泉へでも参りましたら。』

『そら結構ですな、醫師は無論賛成した。何ご云つても手術後の衰弱がありますから、湯治なごは尤も宜しいでせう。』

『函嶺でも宜しいでございませうか辰子は、今沼田が言つてゐたことが、ふご口へ出てしまつた。』

『函嶺、好いでせう。温泉なら何處でも好いのですか、まだ寒いですから、餘り山の奥などは感心しませんな。函嶺も入口の方でしたら……。』

醫師は出て行つた。

辰子は何だか口實を得たやうに思つた。そして電話で其事を沼田に報告したが、稻子たちにも、其れごなく仄めかした。

退院の日には、沼田もちよつご顔を出したが、わざご早く歸つた、日曜だったので、正一ご稻子が遣つて來て、何彼と手傳つてくれた。荷物もあつたので、三人は自動車を一臺備つて、飯田町の家へと歸つた。

家は立關ご六疊の茶の間、それに八疊の座敷と四疊半の四室で、母を迎へると一寸手狭を感じたが、不斷はそれで十分であつた。で、その晩は一月ふりで三人揃つて夕飯の膳に就いたが辰子もその瞬間には、沼田のごも忘れて、子供たちご一緒に楽しく箸を執つた。

『やつぱり自分の家ほど好い處はありませんね。』辰子は心から幸福を感じたご云ふ風うであつ

た。  
で、入院中 後の二週間ばかりは、稻子や正一のこととも忘れがち、何うか慙う急に若返りでもしたやうに、浮々した氣持で、沼田と親しくしてゐるのが、二人に濟まないやうな氣かしてならなかつた。

## 若い同志

翌日は日曜だつたので、竹村が遊びに来た。

彼は正己の遠縁にあたる家の三番目の子息で、稻子の家から五六里もある村の名門であつたが。家が貧しいので、正己が自分の養子にする積りで、大體學費などの仕送りをしてゐた。で彼は帝大の醫科に學籍をおいてゐるのだが、其れも此六月には卒業する筈であつた。

竹村は便宜上、一頃は稻子たちと同棲してゐた事もあつたが、稻子が口の悪い學友仲間。

彼此冷評されたり擲はれたりするのが辛いといふので、此頃は別に素人下宿へ出てゐた。

辰子もちやうご退院して来たところなので、彼はしばらく手術後の経過や、是からの攝生なごについて、彼女と話してゐたが。彼も色にこそ出さなかつたが、辰子には餘り好い感じをもたなかつた。

「いつ頃お歸りですか」こ、彼は訊いた、

「然うですね。」辰子はこの男には出鱈目も言へないと思つたか、婦人科の方ないだけに、いくらか安心だ云ふ氣がしてゐたので、

「院長さんの仰しやるには、當分東京にゐて通つた方が可いそうですがね。」  
竹村もそれ以上別に何にも言はなかつた。

ちやうご時刻なので、稻子は先刻から、晝飯の御馳走に西洋料理を拵へるこかいつて臺所へ出て働いてゐるが、間もなく座敷へ食卓が持運ばれて雪白の卓布がかけられ、薬味入れやバターナイフ、フォークの類がきちんと駢へた。



家は狭まいが一寸三坪ばかりの庭もあつて、部屋も小酒してゐるのが、氣持がよかつた。

「ぢや暫くぶりで、稻子さんの御馳走になるかな。」竹村は緋の着物羽織に、セルの袴といふ身装で、髪も一分くらゐに短く刈つて、髭はこの頃生したばかりであつた、して、色白の、小肥りに肥つた中背の男で、野球で鍛はれた腕や何かは、逞しく筋肉が発達してゐた。

「取置き飲荷が何にもなくてお氣の毒ね。」稻子は好い匂ひのするコロツケなぞを盛つた皿を彼の前におきながら言つた。

「いや結構々々」ミ、竹村はパンを。つてバターをつけながら言つた。

「その代り、後でおいしいコーヒをいれて上げてよ。」

「それは有難い、さあ御母さんも何うです、竹村は辰子にお愛相を言つた。

「そうね、それはコロツケ？何んだかおもしろさうだわ一つ頂きませうか、正ちゃんもお食べ。」辰子はそう言つてこれもフォークを取上げたが、洋食なら自分の方が通だと言はないばかりに一寸手をつける感心しない顔をして。

「結構よ、學校仕込はまた格別ね。」

稻子は冷かれた氣がついたのでちよつと顔を紅くして。

「さうせ御母さんのお口には適ひませんわ。」

「いゝね、ですけれど、私この西洋料理つてものが餘り好ぢやないの。それも腕前のいゝコックか何かの拵へたものなら可いけれど、家庭料理なんものは、さう言つちや悪いけれど、いくら上手でも素人離れがなくて可けないものね。」

「ね、それ亦然うよ、だけさ、拙いながらも自分で拵へて、親しい人に食べてもらふのが、樂しみなんですわね。」ミ、竹村に言つた。

「まあ然うだね、」竹村は顔も上げずに。

「僕も外で食ふのは餘り好かないそれあ御母さんのお説のさほり素人の拵へたものは、どこか間かぬけてゐます。しかし人工的に技巧を凝らしたものより氣持がいいぢやありませんか。」「さうですかね。」辰子は少し躍起になつて、

『まあ然うでも言つてゐるうちが可いんですね。少し好いもレストランの●ツク場でも見たものは、西洋料理なんか可怖くて、手も出せませんよそれ程難かしくて、而倒くさいものなんですだから素人が悠かお料理なんか教はるよりか食べるなら矢張好いレストランへ行つて、何か氣取つたものを、二三品注艾するに限るのよ。』

二

「一體さう云ふ風の物の考へ方が間違つてゐるんだ。」

竹村も稻子も、同じやうに然う思つたが、まさか然うは言へなかつた。で、二人は言合したやうに苦笑してゐた。

『市郎さん！』辰子は暫くしてから、又話しかけた。

『あなた洋食がお好きなら、近いうち新橋のききわ亭へ御案内しませうか。あの家御存じ？』  
『いゝ。ちつとも知りません。』竹村は素つ氣もなく言つた。

『まあ然う？』と辰子は目を丸くして『洋食通の行くところなのよ。主人は横濱のグラランドホテルで腕を磨いた、東京でも一二の腕つききですよ』辰子は得意になつて言つた。

『然うですか』と、竹村は目鏡をちよいと直して、むづかしげな目をして、

『儀ちつとも知りません、そこは書生なんか行くところじゃないんでせう、銀行の重役とか、會社員とか。紳士の行くところんでせう。』

『まあ然うだせうかね。』と、辰子は少し氣が差したが。また却て得意でもあつた、で、苦いとも甘きもつかないやうな微笑を口元に浮べて。

『でも可いじゃないの。私が案内するんですから。』

『それあ結構ですけれど、第一正式に食べることも知らないですから。』

『まさか？』辰子は仰山らしく口を歪捻れるほど首を反した。

『だつて醫科は洒落ものが多いと言ふじやありませんか』

『然うとも限りませんねー。』

『でも、書生の先生さんは、大概道楽者よ。』辰子は巻簾を…やかな優しい指頭に撮んで、内輪に飲んでゐた。

『それお大勢のうちには、そんな人間もゐるでせうが、何處だつて然うでせう、一つは、學生は醫者を親爺にもつてゐますから、一般に學資も豊だつたんでせう。だが、今は然うでもありませんよ。』

『でも、一郎さんだつて、お附合で偶には遊ぶでせう。』

『僕ですか。』竹村は困つた表情をして『いいね、遊びません。』

『何うですかね。』辰子は竹村の顔を、まじく凝視めながら、首を捻つた。

『そんな事はどうでも可いじやありませんか、僕はまあ、ここへ来て偶に今日のやうなランチにでもありつのが、何より愉快です。』

『そんな手放しで、お自惚は言つこなしにしませう。』

『貴女も、少し眞面目なお話をなすつて下さい。我々はまた若いんです、竹村も少し色を正し

て言ふのであつた。

で、口の達者な辰子も、ちよつと黙つてしまつた。

二皿目が運ばれて來た。で、中途席を離れてゐた稻子もそこへ坐つてフォークを執りはじめた。

『何うも御母さんは可けない、先刻から僕はひどく苛めつけられてゐるんだ。』竹村は稻子に訴へるやうに。笑談らしく言つた。

『さう。ぢや、私に加勢して上げてよ。』稻子も笑ひながら言つた。

『何ちがいぢめるんだか、判つたものぢやありやしない』辰子も笑つて、

『學問のある人には逆も敵やしませんわ。』

『だが、我々は別に學問上のお話をしやうと言ふんじやありませんよ。それに今日はお芽出度い日なんですからな。貴女が退院なすつたお祝ひをしなけあならないねわ。』

「ああ、然うね。」と、辰子は先刻から若い同志の、希望と幸福とで、心も身も弾切れさうになつてゐる二人の戀なかせつつけられて、何だか獨り除け者にされてゐるやうな寂しさを感じてゐるが、さう言はれると矢張嬉しいやうな氣がした。

「ではお祝ひに何かおごつてくれる。」

「何が好いですか」竹村が言つた

「さうね、私久しく歌舞伎の匂ひもかいだこころがないから、奢つて頂くなら歌舞伎が好ござんすわ」

「芝居ですか」竹村は頭を搔いて

「舊劇は困りますな、第一時間が長くて、観客が無智な嫌味な人間ばかりでお負に芝居其物が一向我の氣分に適はないですもの。」

「さう。だつて可いじやありませんか。私の爲のお祝ひだと思へば……」

「それは然うだが、もつと我々にも共鳴のできる事でなくちや……ね、稻子さん」

「わ」と、稻子も同感らしく。

「私も舊劇は餘り好かないの。高いお金を出して。あんな物を見るのは馬鹿々々しいわ。」

「然うですかね」辰子はちよつと顔を赧らめて。

「皆さんは高尚でいらつしやるんだから、私なぞと趣味の合う氣遣ひはありませんわ、

「では何うです、僕音樂會の切符を少し背負込んでゐるんですが、貴女も何なら入らつしやいませんか？」竹村は言つた。

「音樂會ですつて」辰子は眉根を擧めて

「音樂會といへば、あのぶか〜さん〜つていふ彼れでせう。」

「樂隊ですか。然うじやないですよあれは音樂じやなくて。一種の俗な囃に過ぎないのです。ピアノとかヴァイオリンとかセロとか、樂器も種々ありますが、一度聽いてごらんなまし、

西洋音楽の智識のなもので、悪い氣持はしませんよ。單に音を聞くだけでも、胸を唆られるぐらゐのこゝはありますよ。日本の三味線のやうな眠くなるやうなこゝはありませんよ。』

『御免だわ私……』辰子は氣のない返辭をして

『貴方も随分皮肉ね、私に音楽會をおごるなんて。』

『いや。皮肉じゃありませんよ。竹村は顔を赧めた。』

『皮肉でなければ冷かしだわ』

『さう取られちや因りますな。でも外に我々がお伴をするやうな處かないんですから、僕はまた書生ですもの。』

『でも此頃は、頼まれて時々診察をするこゝいふじやありませんか』

『そんなものは小使にも足りませんよ。まあ偶に音楽會の切符を買ふとか、ビールを飲むくらいのお金があります。』

『それぢや私が奢つて上げてても宜いけれど、それも西洋料理といふ條件なら。』

『新橋ですか。』こゝ、竹村は首を反して

『そんな上等の處は柄にありません』

『それは然うと市郎さん、音楽會は今日じやなくつて？』

『今日です。午後二時から』

『私行きたいわ』

『僕も其のつもりで、實はお誘ひに来たんてす。若し行くのでしたら、早くしないと駄目です』

『さう、じや支度をして可いこと？』稻子は晴々した聲で言つて

『正ちゃんも行かなこと？』

『竹村さん、行つても可い？』正一は竹村に訊いた。

『あゝ可いとも。僕も其の積りで来たんだから』

三人はやがて大騒ぎをして、辰子だけを残して出て行つた。

#### 四

さも楽しさうに打連れて三人が出て行つた後で、獨り寂しく取残された辰子は、嫉妬ともつかず、僻みともつかず、不思議に氣持のいらくするのを感じたか、其につけても彼等二人が自分に如何な感情をもつてゐるかが、明かに判るやうな氣がして、是から先の長い半生の間を、年和に幸福に暮らせさうに思へなかつた。

すると、そんな事を考へてゐる處へ、つい近所で自動車の止まつた音かしたと思ふ間もなく誰やらからくくと格子戸を開けて入つてくる若があるので、辰子は直ぐそれが沼田だと感づいて、急いで入口へ出て見た。

『ごうも知れにくい處ですな。』沼田は仕立卸しの色の淺春の外套いに、同じやうな色合のソフトを前のめりに冠つて手に何やら土産物らしいものを提げて、草履穿で狭苦しい入口に立つて

ゐた。

『おや、誰方かと思つたら』と、辰子は笑然して『さあ何うぞ……こんな蟋蟀箱のやうな家ですけれぢちやうど誰もゐませんか。』

『あゝ、然うですか』と、沼田は景氣よく座敷へ通つて、特にも今日はぞろりとした、身装をして、病院で二三次見た時から見るに、人品がぐつミ打上つて見えた。

『お嬢さんやお坊つちやんは何方へ入らつしやいましたか。』

『何ですか音楽會があるとか云つて、三人で今出て行つた處なんですよ。』辰子はさう言つて、茶の間の方へ茶をいれに立つた。

『然うですか。實は皆さんをお連れして、何處かで半日遊ぶつもりで、お迎ひに來たのですが其奴は可けませんでしたな』彼はさう言つて指先で薄い髪を撫で揚げてゐた。

『まあ、さうでしたか』と、辰子は茶の間の方から返事をして。

『それは折角御親切にお出下すつなのね。』

「いや、然し又折もあるでせう。今日と限つたことでもありません。」

「それも然うね」と、辰子は漸と沼田の傍へ来て、

「此間中は度々お見舞を戴きまして……私明日あたりお禮旁一寸伺はうと思つてゐましたの。」

「ちねッ」と、沼田は口頭で笑つて

「お禮なぞ何うでも可いですが一渡入らして下さい。皆なんを一つお連れなすつて……いや眞實に。」

「ね、眞實に行きます」

「今日はす留守役ですか」

「ね、今日はお留守番なの」と、辰子は髪を氣にしながら、

「偶に東京へ来て、お留守番なんかさせられちや詰まらないんですけれど、若い若と云ふものは、想察のないものですわね。今日は退院祝ひに私に何か奢りませうなんて言つてるかと思

ふと、私を置き去りにしてぞろ／＼と出て行つてしまひましたよ。それも私が歌舞伎を奢つて貴ひませうと言へば、舊劇は怠惰たの、馬鹿々々しく見てゐられないのよ、散々自分勝手手の熱を吹いて……眞實に腹が立つてしまふ。辰子は訴へるやうに言つた。

まあ然う言つたものでもありません。若いうちは誰しも苦勞が足りませんから。」

「それあ然うだけれぎ……。」

「歌舞伎さういへば私も久しく見たことがないが、時間は如何ですか。」

沼田は腕時計を見て、「二時半じや駄目せう。」

「さうね。行くくらゐなら……。」辰子は甘むるやうに言つた。

「若し何なら帝劇は如何です。」

「帝劇は何ですか」

「さあ、新聞に出てゐませう。」

で、辰子は何處からか今日の新聞を持ち出して来て、其が何やら新作の時代劇に、後が世者

情浮名横櫛に、切が所作だに解つた。

五

「いゝわね。」と、花子は吻をしたやうな聲で言つた。

「役者は誰ですか。座附ですか。」沼田はさう言つて自分も新聞を眺めて

「羽左衛門が加入してゐますな。」

「さう、尙いゝわ。」

「じや何うです、これから一つお伴願ひませうか。」花子は笑然したが

「いゝでもね、私が出るに誰もゐなくなりますから。」

「何時だつて然うじやありませんか。貴女はすつと此方にある人ぢやないんでせう。」沼田は目を丸くした。

「それは然うぢやせぬ……」

其なら可いぢやござんせんか。いづれ鍵は隣へでも預けておくことになつてゐるんでせうから。

「それに泥棒の入りさうな家でもないんですから、安心は安心なんですけれど、是でやつぱし然うも行きませんのよ、私が東京にゐる間はね。」

「いつ皆さんは歸るんです。」

「音楽會で、さう時間のかかるものぢやないんでせうから、遅くも夕飯前には歸つて來るでせうと思ひますけれど、あの人達のことですから、何處へされるかも知れませぬわ。」

「尤も芝居は四時半からですからな。」と、沼田は又時計を眺めて

「まだ二時間もあると、呟いた。

で、二人は外の話に移つて行つた。それも大概病院で話したやうなことばかりで、沼田の自慢に、十の愚痴くらのものに過ぎなかつたが「辰子は何故かこの沼田と話してゐる。今迄いら／＼してゐた暗い氣持が、何となしはつと明るくなつて來るやな氣がして、眞實に氣の合



ふのは、矢張こんな風の男だと思はれた。

然しそれも單に然う思つただけで、そんな氣を興すのが大體自分の迷ひだと、心で心を引締るやうごしてゐた。正一の前途といふことも考へてやらなければならなかつた。そして然う氣がついてみると沼田と一緒に芝居見物なごは思ひもとらぬ事で、たとへ彼者が誰であらうご狂言が何であらうご、その爲に氣持が浮動してはならないご、思つた。行くなら一人が好いご、然うも考へた。

けれど又其の後から、まるで別の考へも浮んで来る。良人の渡瀬はもう可也の年で、而も體も弱い。何時ごんな事が無いごも限らぬ。其の曉に、新夫婦の若い同志が、自分に對して子供ごとしての敬愛も人情も顧みないやうなごごがあるごしたら、其時自分の力になつてくれる者か、周圍に一人でもあるだらうか。さう思ふご、たごひ他人ごはいへ、沼田のやうな昔馴染の男の親切を、仇や疎に思つてはならない。

暫くするご、沼田はこんな處で話してても詰らないご云ふ風で

「何うです、右に左出かけて見やうちやありませんか。私が又後で皆さんに能くお話をしますから」

「いいね、そんな事は介意ひませんけれど……」辰子はちよつと考へたが

「ぢやお言葉に甘へて参りませうかね」

結局彼女は行くことになつた。そして遽に髪を直すやら、お化粧をするやら、大忙ぎで支度をするご、ちよつご一足先に沼田に出てもらつて、自分は後から戸締をして、鍵を隣へ預けなごして、せかくご自動車の止まつてゐる處までやつて來た。

沼田は自動車のなかで、荻を吹かしながら待つてゐた。

「ごうもお待遠さま」辰子はさう言つて、背を屈めて中へ入つて行つた。

指環

或日<sup>あるひ</sup>手<sup>て</sup>は沼田<sup>ぬまた</sup>に誘<sup>さそ</sup>はれて、芝居<sup>しげ</sup>を見<sup>み</sup>に行<sup>ゆ</sup>つて歸<sup>かへ</sup>りに、沼田<sup>ぬまた</sup>の家<sup>うち</sup>へちよつと寄<sup>よ</sup>つて見<sup>み</sup>た。

辰子<sup>たつこ</sup>の案内<sup>あんない</sup>をされぬのは、奥<sup>おく</sup>の八疊<sup>やぶ</sup>であつたが、そこへ出<sup>で</sup>てゐる紫檀<sup>しだん</sup>の臺<sup>だい</sup>だこか、床<sup>とこ</sup>の間の置物<sup>おきもの</sup>や軸<sup>ぢく</sup>だこか、又は座蒲團<sup>ざぼたん</sup>手灸<sup>あぶり</sup>と云<sup>い</sup>つたやうな道具<sup>どうぐ</sup>が、總<sup>すべ</sup>て都會風<sup>とくわいふう</sup>に氣<sup>き</sup>の利<sup>き</sup>いだものはかりで、ひどく辰子<sup>たつこ</sup>の氣<sup>き</sup>に入<sup>い</sup>つた。それに狭<sup>せま</sup>いながら三和土<sup>さんわど</sup>で出來<sup>で</sup>た箱庭<sup>はこにわ</sup>も、氣持<sup>きもち</sup>よく、洒落<sup>しゃれ</sup>たものであつた。言<sup>い</sup>ふ迄<sup>さき</sup>なくそれが、悉<sup>しつ</sup>く壯吉<sup>さうきち</sup>の代<sup>だい</sup>になつてから出來<sup>で</sup>たものばかりでなく以前<sup>いぜん</sup>辰子<sup>たつこ</sup>がここに女給仕<sup>おんなさかじ</sup>をしてゐた頃<sup>ころ</sup>、朝晩<sup>あさばん</sup>目に觸<sup>ふ</sup>れてゐたものもあつたが、然<sup>しか</sup>し其頃<sup>そのころ</sup>から見<sup>み</sup>ると、店の様子<sup>やうす</sup>が立派<sup>りっぱ</sup>になつて、家のなかは何<sup>なん</sup>もなく有<sup>い</sup>福<sup>ふく</sup>らしくなつて來<sup>き</sup>たのは、事實<sup>じじつ</sup>であつた。

『この家<sup>うち</sup>動<sup>うご</sup>るる者<sup>もの</sup>で』出世<sup>しゅつせ</sup>をしたのは貴女<sup>あなた</sup>と私<sup>わたし</sup>ばかりですぜ、沼田<sup>ぬまた</sup>は八疊<sup>やぶ</sup>の部屋<sup>へや</sup>へ、また辰子<sup>たつこ</sup>を落着<sup>おちつ</sup>かせながら言<sup>い</sup>つた。

『皆<sup>みんな</sup>なもう詰<sup>つま</sup>らないこゝになつて了<sup>しま</sup>つて……中には何處<sup>どこ</sup>に何<sup>なに</sup>うしてゐるか、影<sup>かげ</sup>も形<sup>かたち</sup>もなくなつた輩<sup>たぐひ</sup>もある』云<sup>い</sup>つたやうなこゝで……その點<sup>てん</sup>では貴女<sup>あなた</sup>も、まあ私<sup>わたし</sup>もまあ幸福<sup>しあわせ</sup>な方<sup>ほう</sup>です』

『さうね』辰子<sup>たつこ</sup>は悉<sup>しつ</sup>皆<sup>みな</sup>氣分<sup>きぶん</sup>が癒<sup>なほ</sup>つて、何<sup>なん</sup>だか自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の家<sup>うち</sup>へでも來<sup>き</sup>たやうな心安<sup>こゝろやす</sup>さを感じ<sup>かん</sup>じながら、

『私<sup>わたし</sup>なんか詰<sup>つま</sup>らないんですけれ、貴方<sup>あなた</sup>こそ好<sup>い</sup>い身分<sup>みぶん</sup>たわ。』

『何<sup>なに</sup>に別<sup>べつ</sup>に好<sup>い</sup>い』云<sup>い</sup>ふ程<sup>ほど</sup>ちやありませんがお蔭<sup>かげ</sup>で店<sup>みせ</sup>は盛<sup>さか</sup>り一方<sup>ほう</sup>です。』

『結構<sup>けつこう</sup>だわ』

『これで子供<sup>こども</sup>があれば申分<sup>まをしわけ</sup>なしですが、さうは問屋<sup>もんや</sup>で卸<sup>おろ</sup>しませんや』

『する』其處<sup>そこ</sup>へボーイ<sup>ひやく</sup>が一人<sup>ひとり</sup>やつて來<sup>き</sup>て、『且<sup>だんな</sup>那<sup>な</sup>』と、部屋<sup>へや</sup>の外<sup>そと</sup>から聲<sup>こゑ</sup>かけた。そして自働車<sup>じどうしゃ</sup>は歸<sup>かへ</sup>つても可<sup>い</sup>いんですか』

辰子<sup>たつこ</sup>は遽<sup>たじ</sup>に氣<sup>き</sup>がついて、

『あ、さう〜、私<sup>わたし</sup>あの自働車<sup>じどうしゃ</sup>を拜借<sup>はいしゃく</sup>して歸<sup>かへ</sup>りますわ。』

『何<sup>なん</sup>んですね來<sup>く</sup>ると早々<sup>さうさう</sup>もう浮腰<sup>うきこし</sup>になつて……まあ然<sup>さ</sup>う言<sup>い</sup>はずに、少<sup>せ</sup>し遊<sup>あそ</sup>んで行<sup>い</sup>つて下<sup>くだ</sup>さい。』

今に何か腹にたまらないやうなものを拵へさせますから。』

『いいね、然うはしてゐつれませんか。またゆつくり來ます、ミ、ボーイを振顧つてね、ボーイさん、ちよつと自動車を待たしておいて頂戴。』

物然し沼田は然うはさせなかつた。

『ぢや、まあ、長くはお止めはしない。もう一時間ばかり話して行つて下さい。そしたら私が別の自動車：お宅まで送りますから』

辰子がちく／＼してゐる間に沼田は一先つ自動車を返すやうにボーイに吩咐してしまつた。そして其れと同時に辰子が見たことのないやうな料理や、キラソウのやうな飲料なきがそこへ運ばれて來た。

『お手荷物の御馳走も可笑しいですが、さあ言つて取つて差上げるものもなし、これは野菜です。から腹にたまらなくて可うございます、沼田はさう言つて、ボーイが置いて行つた皿の位置を直しなごして、更にコップに紅い酒を洋いだ。

する。辰子も仕方がない云ふ風で一、且退つた座蒲團の上に來て、また尻を落着けた。

『何うです、一つか二つは可いでせう。』

『は、戴きますわ』辰子はさう云つて、繊細な指頭に小さいコップを取あけて、一口口をつけた。する。三口當りの好い甘いその酒が、ぱつ三口のなかで開くやうな感じがして、疲れ萎れたやうな頭腦がやがて、生き／＼して來るやうに思へた、で彼女はまた一口呑んだ。それは強ち呑んだ。このないほど珍らしい物ではなかつたけれど、キラソウのコップに口をつけるのも十七八年振だと思ふ。其頃のこころが懐かしく思ひ出されて、田舎へ引込んでからの長い寂しい生活の單調さが、今更のやうに考へられた。

少時する。辰子は顔がほうと熱つて、何日の間にか酔の出て來たのを感じたが、同時に時間が餘程遅いこころに氣がついた。

沼田も顔が熱るご同時に、少し調子づいて、更にベルモットをなぎボーイに命じて、自分も飲み辰子にも勧めた。

「私は日本酒の方は、かう意氣地がありませんがそこは商買柄で、洋酒だも些こはいけるのです。沼田はこんな事を云つて、さも心持よけにコップを手に取あけて、電燈の明に透して眺めた。酒は黄金色に透徹つてみわた。

「それに洋酒は、醒めぎはの心持が好いちやありませんか。」

「さうね」こ、辰子も少し體を崩しかけて、熱つた頬を撫でながら、

「私もあの時分は、お客さきのお相手で、随分呑んだこもありません。だからお酒は嫌ひぢやないんですよ。殊にこんなお酒は甘くて、口觸りが何んともいへないのね」

「お氣に召したら、澤山召食つて下さい」こ、沼田は笑談らしく言つて、

「だが、昔馴染云ふものは又格別ですね。」

「わ、それは何うしてもね。辰子は媚びるやうに首を傾けて、體に嬌態を作つた。

「お體も十分でないやうなら、當分東京にゐたら何うです。又といつても、なか／＼出れるもんぢやありません。殊にお子さんも来ておいで、すから。」

「わ、私は然うしたいんですけれごね。」

「渡瀬さんに濟まないか知らんが、私もかうして久振でお目にかかる、何だか昔の情人にでも逢へるやうな氣持がしましてね。」沼田は少しんみりこなつて、

「これでも私もあの時分の競争者の一人だつたからね。」

辰子は紅い顔を一層紅くした。そして照かくしに酒を一口飯んで手布で口のはたを拭ひながら、

「厭な沼田さんね！昔のここなんか言つこなしにしませう。」

「然うですか」こ、沼田はわざと不満らしい顔をして、

「だつて可いぢやありませんか。さうせ貴女は渡瀬さんの令夫人で、私はコック上りの洋食屋なんですから。」

「冷かしや可けませんよ。」辰子は少し憤つたやうな表情をした。

「だけさ、可懐しいぢやありませんか。」沼田は又目を細くして云つた。

「それあ何うしてもね。」

「私もあの時分は、辰子さんに逆上せたものだつた、コク揚の評判でしたぜ。それに實をいへば、貴方だつて萬更でもなかつた。」

「然うでしたかね。」辰子は極悪さうに俯いてゐるが、三方四方が、競争者のあつた其の時分のこと、夢のやうに思出された。

「でも、もう年を取つちや駄目よ。」辰子は嘆息するやうに云つた。

「貴女はちつこも變りませんぜ。」

「嘘ですよ。」

「いや、實際」沼田は窓臺ごしに、じつと辰子の酔つた顔を凝視めながら

「あの時分のお辰さんも、今ので十夫人も同じですぜ。」

「貴方だつて、そんなに變つてやしないわ。」

「ただ少し頭が禿けたばかりですよ。」彼はさう云つて、頭を撫でて見せた。

「渡瀬は禿けないかはりに、眞白になりましたよ。」

「いくつ違ひでしたかね。」

「親と娘ほご……。」

「さうでないだらうが、十もちがゐますか。」

「いいね、もつと。」

「それあ貴方が少しお氣の毒だ。」沼田は眉根を擧めたが、

「だが、私も貴女がまさか渡瀬さんのところへ行かうとは思はなかつたね。」

「さうですかね。」辰子は恍けた目をして笑つた。

「自分でも、何だが解らないわ。若い時分は氣紛れですからね。」

「然うでもありますまいけれど」と、沼田はくすぐつたいやうな表情をして、

「私も今の身分だつたら、何アに、自分の思つた女を人にとられて黙つてなんかもんずか、否でも應でも自分のものにして、渡瀬さんに鼻をあかしてくる處ですが、惜ないことは當時は身體中油の入染んだコックです。いかに切齒しても追眺かない。」

「おや／＼」と、辰子もくすぐつたいやうな笑い方をして、

「大變なことになつたわ。」

「いや實際」と沼田は目の色を變へて、

「實際私は残念だつた。あの糞阿魔め、何うしてくれやうかと思つた。今更愚痴を言ふ譯ぢやないが、あの時はそれほぎにも口惜かつた。極りがわるくて、このコック場にもゐられなかつた。」

「でも、ずつと居たちやありませんか。」

「それも有難いことには、あの内分私の代りになるやうな料理人がゐなかつたからです。で、主人が色々心配してくれて、嫁を取つたなんて話もありましたよ。けさ、私は妙な性分で、殊に年も若かつたから、そんな氣にもなれず、仕事は怠ける、自棄にはなる云ふ風でね、一三年ぶら／＼してゐましたよ。」

「然うでしたかね」

「で、まあ陰で……と言つたところで、誠におはづかしい話だが、この家へすわるこゝになつて、衆から羨やまれるやうな身分になりましたが死んだ家内が……私には主人の女房でしたから、御存じの三ほり年も大變違ふし、今迄壯さん壯さんと言はれて、使はれてゐたんだから、そこが何うも變な氣持で餘り好いもんぢやありませんでしたよ。」

「それあ然うかも知れないわね。」

「で幸か不幸か、あれも死ぬ。條件なしに私はそつくり店に財産を貰ふといふ譯で、まあ幸運

は幸福かも知れませんが、やつぱり昔のことが忘れられないものだからこんな女を見ても何うといふ氣も起らない。いや、眞實の話です。沼田は少し感傷的の調子をさへ帯て來た。『それは然ういふものかも知れないわね。』辰子も彼れの熱心に惹着けらたて、心持目を潤ませながら言つた。

『廣い世の中に女も澤山あるのに、私のここをそんなに思つて下さるのは、たとひ嘘でも嬉しいわ。』

『嘘ぢやありませんよ。貴女は薄情だから可けない。』

『そんな譯ぢやないけれど……。』

『だつてあの時、二人一緒になつたら、何處か淺草邊で、氣のきいた一品料理を出さうとまで話がついてゐたんだ。』

『そんな事もありましたつけ。』

『ありましたつけぢやありませんよ、それだから薄情だといふのだ。』

辰子は困惑の色を浮べて、俯いてしまつた。

『しかし是は私の心持をお話するだけですよ。今でもあの時分のことを私が忘れないでゐると云ふことを、貴女が知つてさへくれれば、それで可いんだ。』

『わ、それ有難いと思ふわ。』

『さう言はれると、沼田も何だか氣がひけて、語が出なかつた。』

『いや止ませう。濟んだことを言つたつて爲方がない。私はもう諦めてゐます。私は獨で通します。その方がみんなに氣樂だか知れやしない。』沼田は少し絡むやうな調子で云つた。

『處で、貴女が今夜何うしても歸るといふなら 私が上げたい物があるんです。』

『私に？』

『貰つてくれますかい。』

辰子は沼田が何を言ふのかと思つて、疑惑の目を睜つたが、然し彼の様子が眞面目なので、素直にそれを受入れることにした。

「何だか知りませんが、私が戴いていいものでしたら、悦んで頂きますわ。」

「別に貴女の御迷惑になるやうな品ぢやないんですが、實は貴女の指に是非箝めて頂きたい指環が一箇ありますので……。」

「指環？さう！」辰子は思はず咬いて、自分の手を見て、顔が紅くなつた。指環といへば自分の指にも二つばかり光つてゐるのだが、一つは金の蒲鉾型ののべで、一つは餘り珍しくもない眞珠入であつた。

それと同時に、沼田もじろりと彼女の指を見たが、別に輕蔑の意味ではなかつた。

「實は家内は、そんな物が道樂でしてね、いやダイヤ入りだことの、いやプラチナだことのと

始終天賞堂や玉屋あたりから珍らしい品を取寄せて買つてゐましたが、一體が純性ですから長くは箝めてゐられない。氣に入つた人にくれてやるとか、賣つて了ふかといつた風でね。でも十箇やそこいらは、好いものは始終もつてゐましたよ。」

「それあ然うでせうともね。お金が澤山お有りなんですもの。」辰子は淋しく笑つて

「だけぢ、田舎ぢや餘り好いものはめるのも話らないのよ。」

「それあ然うでせうけれど、まあ一つ見て下さい。」

沼田はさう言つて、次の部屋にすゐてある三桿ばかりの筆筒の端の一つのけんどんの中から小函を取出して来て、それを餉臺のうへに置いた。

「散らかると可けないと思つて、目星いものだけは此のなかへ入れておいたはずですが……。」と沼田は同時に筆筒の抽斗の中から取出して来た、小さい鍵で函を開けながら、

「これが其の、家内が床についてから、始終取替へ引替へ箝めかへて楽しんでゐるた品でして……プラチナにダイヤな鑲めた、至つてハイカラな形のもものが一つ、それから此は餘り高いもん



ぢやありませんが、彫刻が氣に入つたと云つて死ぬまで離さなかつた高彫の品……それだけは箝めたまま火葬場へもつて行つてしまひましたが、考へてみれば馬鹿な話です。」と、沼田は苦笑した。

「でも、それは爲方がないわ。」

「それあ然うです。外にこれといふ道榮もなかつたんですからな」と、沼田は小函のなかからサツク入の指環を二つ三つ開けてみて、ちよつと顔を擧めてゐたが、

「これが其の、一時大變氣に入りの指環でね。」と、一つサツクのまま辰子の前においた。

「へ、これが……」辰子はそつと手に取あけた。

「ちよいと能く何來てませう。」

「ブラチナね。」辰子は目を輝かした。

「ブラチナにダイヤを大小三つ箱込んだものです。菱形で少し嚴いが家内はぎつらかといふと大軀で肥満してゐて、様子が男つほい方でしたから、そんな物が柄にあつたのです。けど、貴

女にも似合はんこともない。誰がつけてゐても、直打ちのものです。それを一つ、失禮だがはめていただきますせうか。」

「こんな結構な品を？」辰子は紅い顔をして、サツクから指環を取出して羨望的な目を輝かして眺めてゐた。

「それがお氣に入らなければ。外に金の好いのもあります。これなぞもダイヤの性から云へばそつちよりも寧ろ好のなさうで……。」

「へ、と、辰子はまた其を手にとつて眺めた。

## 五

沼田はそれから、大凡一ダースばかりの指環を、一つ／＼出して辰子に見せた。中には辰子にさへ貫つても餘り有難くない品もあつたが、皆な相當に金をかけたものばかりであつた。「こんな物を私は賣るのも惜しいし、くれてやる人もないので……尤も貫ひ手は澤山あるが、

私の氣に入らない人にははめてもらひたくないので、失禮が知らんがお土産に一つ何れでも一番好いのをお持ちなさい。」

「さうね、お上さんのはめたものなら、私にはめても可いわ。では遠慮く頂戴しても可くて？」辰子はさう言つて、やつぱり一番初めに見せられた白金にスタア型のタイヤ三箇入の指環を撮みあけて、指にはめて見たが、辰子の方が痩せてゐるのでゆるくであつた。

「おや、こんなに竟いわ……」辰子は手を握つたまま彼の前に出してみせた。

「はは」と、沼田は軽い失望の色を浮べて、眞白いその手を眺めてゐるが、「どれ！」と云つて自分の手で拔差を試みたりした。

「成程これは少し大きいかも知れませんが、しかし今は貴女も病氣あがりだから、痩せてゐるけれど、今にちやうどにはまりますよ。何なら少し小さくさせても可い。」

「さうね」と、辰子は指を延したり、屈めたりして見てゐるが、「でもこれを奥の方へはめて私のこの蒲鉾型の一つを壓へにはめとけば、抜ける氣遣はありませんよ。」

左に右辰子の指には、その指環がよく似合つた。

「ほんとうに頂いても可いんですの。辰子は飾かず眺めてゐた。

「は、どうぞ。その位の指環をはめてゐる人は、この廣い東京にも澤山ありませんぜ。」

「然うですとも。知には過ぎた品ですわ。辰子は何か思ひがけない幸運が、自分の身の上落ちて來たやうに歡喜に、相恰を崩しながら云つた。

「だが、それを貴方にはめてもらへば、佛も悦びますよ。」

「まさかこの指環が、私の指にはめられるとは、お上さんも御存じなかつたでせうよ。これも何かの因縁かも知れませんか。」

「眞實です。亡妻が二人を引合したのかも知れません。」

「ほんとに然うかも知れませんか。」

「亡妻は私たちのことを、よく知つてゐましたからな。」

「だけど、お上さんの靈の入つた指環なぞ濫にはめて、怨まれても困るわ。」

「笑談ぢやない。」沼田は笑つて、

「それに亡妻は慾のない女でしたから、そんな物の一つや二つ誰が持つて行つたつて何と思ふものですか。亡妻は亡る前に、よく然う云つてゐました。私が亡つたら氣に入つた若い女を女房に持つが好いつてね。だから、指環なども、貴女にはめてもらへば、亡妻も満足する譯ですよ。」

辰子は何だか慄つたいやうな氣がした。そして紅い顔をして俯いたが、さう厭な氣もしなかつた。

「それは然うと、もう何時でせう。」辰子はふと氣がついたやうに云つた。

「さあ」と、沼田は床の間においた腕時計を覗いて、

「もう十二時過ぎ……彼此一時ですぜ。」

「もうそんなになるんですか。道理で何だか、外が靜かになつたと思つたわ。」  
で、辰子は周章で自動車を呼んでもらふことにしたが、二三軒電話をかけた結果どこにも一

臺もないと云ふボーイの報知であつた。

## 六

「何うも有難うございました」と、辰子はボーイに會釋をして、

「それぢや可うございませす、私一人で帰りますから。何處か近所の辻で拾つて行きませう。」

「然うですか」こ、沼田は失望の色を浮べて、

「然し伸のうへで、又腦貧血でも起しちや大變ですぜ。やつぱり私がお送りしませう。」

「いいね、もう大丈夫！それに這那物迄戴いて、悉皆氣分が快くなりましたから。」

「それぢや強ひて止めませんが、まだお歸りには間もあるこゝでせうから其のうちもう一度晝間のつくり遊びに来て下さい。」沼田は熱心に言つて、

「私もまだ貴女にお見せしたい物もあるし、お話も残つてゐる。いつか言つたやうに、一日函

嶺へでも行つて、ゆつくり話させよう。』

『私も出来ることなら、ゆつくり御厄介になりたいんですよ。』と、辰子は指環を眺めながら思はせ振な嬌態を作つて、

『これから又あの山の中へ歸るのだと思ふに、何だか穴のなかへ入るやうな気がしますの、昔馴染の貴方にお目かゝつたのが却つて思ひの種なのよ。』

『それは眞實のこゝですか。』沼田は笑つて、

『いや嘘にもさう言つて頂くと、私も嬉れしいです。……私の心持を正直にいへば、貴方にお子さんさへなければ、そんなに田舎に有いたさいふのなら、一つ思断つて、東京にゐて頂きたいと、まあ言ふ處ですが、大きな坊ちやんがあつて見れば、さうも行かない。世の中は思ふやうにはならないものですよ』と、深い沼息を吐いた。

『さうなれば、私も願つたり叶つたりですわ。』辰子も心から言つて、

『だけれど、お互に二十代の時分と違つて、輕卒なこゝは出来ませんからね。』

『それ處ぢやありませんよ。』と沼田は深い目色をして、

『笑談や一時の氣紛ぐれで、こんな事が言へるものぢやありませんや。私はもう此間から、其の事ばかり考へてゐるので……それも何に、私と一緒になつて戴かうなんて、そんな問題はさておいて、貴女が田舎がそれ程厭なら、まあ當分氣樂に遊ぶつもりで、家へ來て備人の見張でもして戴ければ、それで可いので……。』

『結構だわ。』

『何うです、一つ然う云ふことに御相談ができませんか。』沼田は一膝乗り出して、

『貴女がその氣なら、坊ちやんの一人ぐらゐ、何時でも引請ます。學校へも出します。御本人の出來次第で大學へも出します、洋行もさせます。言ふまでもなく貴女もごんな贅澤をして一生氣樂に暮せるやうにします。まあ、商賣は洋食屋だが、金さへあれば威張つたものです。』

『それあ然うですこゝも』と、辰子もひびく心が動いて、

「それに私どつちか云ふと、元とく客商賣が大好きなんですからね。」  
「それぢや尙の事です。實際辰子さんのやうな繚致をもつてゐて、田舎で朽ちる云ふ氣が知れないぢやありませんか。」  
「それは私にしたつて、波瀬が田舎へ引込むは思はなかつたんですもの、私は瞞されたんですからね。」

「まさか然うでもありませんまいが東京で玄關を張るのも骨が折れますから、其れよりは地盤の出来た生れ故郷の方が優だといふので、つひ引込思案に成つてしまふのですよ。」沼田はさう言つて、急に望みを得たやうに、それぢや其のつもりで、今夜はもう遅いから宅にお泊りなさい御覽のさほり部屋は三つもありますから、何處でも氣に入つた處にお寝みなさい。」  
「さうね。それぢやお言葉に甘めて、昔の古巢に泊るとしませうかね。」  
「はゝゝ、それが可がすよ。」沼田も頭をかきながら笑つた。

## 上 京

辰子の良人の渡瀬が、妻の歸りを待たぐねて、急に上京して來たのは、四月の十日過ぎで東京はもう櫻の花も散方になつて、人の雑踏も埃もいくらか静まつた頃であつた。

渡瀬が手頃なスーツケースに細捲の傘、子供に食べさせるための、白馬山の辰の砂辰漬に氷豆腐なごをもつて、フコック姿で彼等の借屋へついたのは、午後の四時頃であつたが、辰子はその日も家をあけてゐて、稲子ばかりが櫛がけで、臺所働きをしてゐた。正一はその日も學校で野球でもやつてゐるとみけて、まだ歸つてゐなかつた。

稲子はまさかと思つた、父の姿を見たとき、胸がはらりこした。父に逢ふのが厭ではなかつた。母の辰子が折あしく家をあけてゐたからであつた。

無論彼女の家をあけるのは今日に限つたことではなかつた。彼女は、或時は病院へ行くと

言つて、朝から家を出て、夜遅くまで歸らないことがあつた。或時はまた其まゝ外で泊ることもあつた。

いつか芝居で卒倒して、其のまゝ沼田の家へ寄つたこが言つて、明朝の十時頃、子供たちへの土産をこてく提げて、白働車で歸つたこがあつた。土産は重に西洋の食料品であつたが高價な葡萄酒などもあつた。そして其から間もなく、函嶺へ一晩泊りで行つたこもあつて、それは昔の友達と一緒だ云ふのであつたが、稻子には其の相手の沼田であるこが、略推測されてゐた。プラチナの指環が、いつとなく母の指に異様な光を放つてゐるのも、稻子には不安の種であつた。

で、彼女も、まさかに母が、父の體面を傷け、延いては自分や正一の前途に障礙を來すやうな、無思慮なこはしないだらう信じてゐた。辰子自身もそれを彼等に言明してゐた。

「沼田があのだの店の主人になつたので、何かなし其が自慢で、昔の知人に見せ街かしたくて爲方がないんです。でも、あの人は親切で、好い人ですから、私が行くのを大層悦んで、親類交

際をしませうなんて言つてくれるんですよ。別に何うかうと云ふ意味はないんです。綺麗に交際してゐるんですから、心配はありませんの。』

辰子はさう言つてゐた。

併し程子や正一にして見れば、たゞひ汚はしいことはないにしても、その爲に母の田舎へ歸るのが、段々延引してくるのが、氣にかゝつてならなかつた。それも先方が昔馴染の西洋料理の主人とあつては、餘り感心したことでもなかつた。夫でなくとも、醫師の夫人としては、總てが下卑てゐて、誰でもちよいと眉を擡めるくらゐだのに、そんな男と親しく交際ふのは災難だと思はれた。

稻子は正一のためにも、それを心配しゐた。そして一日も早く、毎に田舎へ歸つてもらいたいと念じてゐた。

ところへ父が急に、差當つて何の前觸もなしに上京したのであつた。稻子は氣が揉めてならなかつた。

「お母さんはるないのかい。」父は上るとすぐ然う言つて、家中を見廻した。

「ね、今日はちよつこ。」稻子は恆惚しながら言つた。

「正」も一緒か。」

「いゝね、正ちゃんはまだ學校から歸てゐませんの。」

「お母さんは何處へ行つたか。」

「さあ何處でせうか。」稻子はおぎ／＼して、

「何處とも仰いけませんでしから。」

父は不氣嫌さうに黙込んでしまつた。

二

渡瀬は醫科器械の少し買込みたい物もあつたし、妻の辰子の歸りが餘り遅いので、健康の具合も何うかと氣にかゝつて、急に思い立つて上京するこゝになつたのだが、病院通ひの時間

でもないのに、家をあけてゐるので一寸氣嫌を損じた。然し娘の稻子を捉へて、繼母のこゝを彼比詮索するのも可笑しいやうな氣がして、其れきり…つてしまつたのであつた。で、彼は洋服もぬがずに、暫らく茶を飲みながら、稻子と話をしてゐた。

「お父さん、お召替でもなすつたら如何です。」

稻子はこの冬の休みにも歸省しなかつたので、父を見るのは去年の夏以來であつた。それも繼母の辰子がゐるからで、父には逢ひたいと思ひながらも、つひ自分の家に親しみが感じられないやうな氣がしたのであつた。そして其の一年弱のあひだに、父の口髯の白髪がめつきり殖へたのを見るこゝ、何ごなし心細いやうな氣がしてならないのであつた。

渡瀬はまだ大學の醫科に籍を置いてゐる時分に稻子の實の母にあたる先妻と結婚して、時々歸省しては逢つて居るほか、東京と山舎に別れて住んで居たが、身體の弱かつた彼女は稻子がまだ幼い時分に病死して、渡瀬はそれから間もなく、今の辰子との關係を作るこゝになつたのであつた。しかし辰子自身も言つてゐる通り、渡瀬は若い愛妻に別れたのが動機となつて、辰

子に新しい關係の生じた時分には、まだ田舎へ引込む氣はなかつた。何處までも東京に止まつて研究を續ける積りであつた。それが父の遽の病死によつて、急に田舎の家を繼ぐことになつて、辰子にも因果を合めて、東京を引揚げて行つたのであつた。

三年五年十年に經つうちに、初め嫌がつてゐた子も、爲方なし少しづつ土地に慣れて來てそれには正一といふ胖もあつて、到頭田舎に落着くことになつたのであつたが、でもまだ見果ぬ夢を後を追つてゐるやうな氣持は、辰子に残つてゐた。このまゝ田舎に埋もれてしまつたのでは詰らないと云ふ氣が、時々してゐた。こんな山の中の寂しい村で一生を送らなければならぬのかと思ふと、熱々厭になることもあつた。辰子はそれを心で思つたばかりでなく、折にふれては口や様子に現はして不足を訴へることもあつた。

渡瀬はよく其氣持を知つてゐた。そして出来るだけは、彼女の心を樂しませるやうに、總ての自由を許してゐた。で、彼女の日常生活も自然に放縱に派手に流れがちであつた。村の問題になるほどの衣裳を東京へ誂へたり、近所の娘たちが目を丸くするほど、化粧に覺き身を寢し

たりしたで、今渡東京へ手術のために東京へ出なければならぬことになつたに就いても、渡瀬は何もなく不安を感じてゐた。暫くでも東京の風に當てゝおくのが心配であつた。それだのに退院してから、大分日がたつてゐるに拘はらず、辰子は歸つてくる氣勢もないのであつた。渡瀬はもうじつじつ待つてゐられなくなつた。で、彼は様子を見に、上京して來たのであつた。

『多分こんな事だらうと思つた。』渡瀬は娘の手前、口へ出しては言はなかつたが、腹ではさう思つて、妻の氣儘を不快に思つた。

暫くすると、彼は氣を直して、靴の中から和服を取出して、それに着替へて、左に右妻の歸るのを待つことにした。

こかくするうちに、日が暮れかゝつて、正一も運動に疲れて歸つて來た。稻子は臺所で夕飯の支度に取りかゝつた。父は晩酌をやる習慣なので、近所の内儀さんに頼んで、酒も取つて貰つた。



三人は旋て久しぶりで、父子團樂の楽しい晚餐の膳に就いた。

三

渡瀬はこの場に辰子のゐないことを、甚く不満に思つた。眞實を言へば、辰子が偶には東京を出て来て、二人の子供の世話を焼くべきだが、今度などは其には好い機會なのに、餘り家にもゐないらしい様子なのが物足りなく思はれた。

「御母さんは始終家をあけてゐるのかい。」彼は二人の子供を相手に、ちび／＼飲みながら正一に聞いた。

正一はぎぎまきして、姉と目を見合した。

「いゝね、そんなこともございませぬの。」稻子は其場の空虚な氣分を取繕うために、そう言つて應へたが、渡瀬はそれが眞實とは思へなかつた。

「御母さんの處へ、誰か尋ねて來る人でもありはしないか。」

「いゝね、別に……。ね、正ちゃん！」

正一は頷いた。

「御母さんは何處か遊びに行く處でもあるのかい。」

「は、淺草の御母さんら叔母さんと、それから新橋の常盤亭に云ふ西洋料理の……」と、稻子は言ひかけたが、父が厭を顔をしたので、急に黙つてしまつた。

「ときわ亭だと？」渡瀬は獨語つたが、

「馬鹿な奴だなあ！」と心から嘲るやうに言つた。

姉も弟も怕れて黙つてしまつた。

「さう云ふ馬鹿だから、私は彼奴を東京へ出すのが心配だつたんだ。して、ときわ亭へは度々行く様子か。」

「いゝね。」稻子はおづ／＼答へた。

「お前たちは、あのときわ亭と云ふ家を知つてるか。」渡瀬はわざと正面を切つて、嚴肅な顔を

して訊いた。彼は大分酔が發してゐた。もう辰子の閱歴を秘密にしても爲方がないから、寧ろ總てを暴露してくれると云つた風であつた。

「いゝわ」と、稻子は正一と顔を見合つて、不安さうに應へた。

「御母さんから何も聞いたことはないか。」

「あすこの主人が、もとコツクをしてゐた人ださかで、私一度病院でちよいと見たことがある限なんですの。」稻子は應へた。彼女とても、辰子の比頃の口吻や、態度で、母がさきわ亭にゐたことがあらうくらゐのこゝは、想像してゐるが、そんな事は弟にだけは知らせたくはないと思つた。

「コツクが主人になつた？」渡瀬は驚異の目を睜つた。

「何ですか、そんな事を御母さんが仰やつてゐらつしやいました。」

「そしてお母さんが、度々御馳走になつて来たんだね。」正一は何んの氣もつかぬ風で、

「一度なんかあすこで泊つたと云つて、大變な御馳走を僕等に持つて来たぢやないか。」

「わゝ。」と稻子も言つたが、目顔で弟を制した。

正一は急にしよけて了つた。

渡瀬の耳には、其が一々明白した深い意味をもつて響いて來た。稻子が困つてゐる様子も解つた。彼は今度の辰子の上京について、豫て心配してゐたことが、てつきり事實になつて現はれたやうな氣がした。彼は悉皆今迄の氣分を破壊されてしまつた。酒ももう甘くは飲めなかつた。話もはずまなかつた。

しかし其間にも、辰子が歸つてくるかと思つて、些とした物音にも、耳を傾けてゐるが、飯がすんでも、辰子は歸つて來なかつた。寝る時分になつても、やつぱり歸つて來なかつた。

辰子が歸つてこないのに失望したのは、父ばかりではなかつた。稻子も正一も同じやうに氣を揉んでゐた。

翌日は、父は朝早く訪ねる處があつて、學校へ行く子供たち二人と前後して家を出たが、稲子は母の歸つて來ないのに、氣を苛立たせてゐる父が氣の毒なので、一二時間遅刻する覺悟で一寸きわ亭へ様子を見に行くつもりで、日比谷方面行の電車に乗つた。

然も電車のなかで考へて見るにそれも何だか母の弱點を突くやうなにはひもあるし、料理屋なごを尋ねた經驗もないので、一寸氣が差した。で、日比谷で電車を降りるに、自動電話をこきわ亭へかけて母の在否を確かめ、若しゐるなら、父が上京したことを報すだけに止めておかうと思つて急いで電話をかけた。

するに直ぐ電話口へ女給仕人らしいのが一人出て來て、物馴れた調子で、しかし、曖昧な態度で應答へをした。その答へによるに、そんな方はゐない云ふのであつたが、ちよつと待つてくれ云ふので、奥へ引込んだかと思ふに、旅てまに電話口へ出て來て、

「渡瀬さんの夫人なら、在しやるさうでございます」と、前よりも一層丁寧な口の利き方をした。そして、稲子が、辰子に一寸電話口へ出るやうに頼むに、間もなく彼女が出て來た。

「申し、私ですよ、貴方は稲子さん？何か用？」辰子は訊いた。

「はあ、お母さんでいらつしやいますか。私稲子ですがね、あの、實は昨日お父さんが急に御上京なさいまして、昨夜も遅くまでお母さんのお歸りをお待たしたんですけれど、お歸りがありませんから……。」

「さう」と、辰子は沈んだ聲で應へたが、

「ぢや可ござんす。是から直ぐ歸りますから。」

「は、どうぞ……お父さんもお出かけになりました、お歸りは多分お晝過ぎだらうと思ひますけれど……。」

「さう！それでお父さんは、私が此處にゐることは御存じ？」

「いゝね、別に何處とも申しませんでしたけれど……私その事について、前かどに一寸お母さ

んにお目にかゝつておく方が可いかとも思ひますの。」

「然うね。ではお父さんは、私がるのに機嫌が悪いとでも言ふの。」

「何」と、稻子は聞かないやうな聲で答へた。

すると其時沼田も電話口へ出て來たらしく、辰子と二人で何か話してゐるのが、此方まで聞けたが間もなく又辰子の聲で、『ではね、御苦勞さまですけれど、一寸比處まで來て頂きませうか。』

「何、参りませう。』

『では待つてゐますよ。』

十五分とたゝないうち、稻子はときわ亭の入口へ來てゐた。朝がまだ早いので、階下の広いカフェには、人の影もなくて、大理石の卓子や椅子が、綺麗に並んでゐた。若い男の或者は、卓子の上の花を取替へてゐた。女給仕人の或者は姿見の前に立つて、顔を直してゐた。或者は椅子にかけて、今朝の新聞を讀んでゐた。

稻子はおぎ／＼した風で、入口へ出て來た女仕給人の一人に案内を乞ふた。そして間もなく薄暗い奥の一室へ通されたが、沼田がそこにゐて慇懃に彼女を迎へた。

「ようこそ入つしやいました。さあ何うぞ」と、彼は自分で座蒲團などを出してくれたが、要りけに其まゝ直コック場の方へ行つて了つた。

不意に辰子が、廊下の方から顔を出したが、こゝが自分の家だと云ふやうな自由さが、其の様子に歪々見わた。

## 五

辰子は有繁に極の悪さうな顔をして、

「何うも濟みませぬね」と、彼女の傍に來て坐つた。「今日は學校は？」

「これから参りますの。私學校へ行く前に、お父さんに秘密で此方へ参つたんですの。」稻子は大人つほい態度で言つて、

「お母さんが何處へ行つてゐらつしやると云ふことも、お父さんには申しませんでしたから、御母さんは何にも御存じない積で、お歸りになつた方が可いかと思ひますけれど……。」

「然うですか。辰子は急に暗い顔をして、稻子の大人っぽい計らひを感謝する代りに、却て迷惑がるやうな風を見せた。」

「だけれど、私は別に悪いことをしてゐるんぢやないんですのよ。」

辰子は少し間をおいてから、鼻の頭で笑ふやうな調子で、

「だからここへ來てゐたことを隠す必要も、稻子さんのお迎ひを受けたことを秘密にする必要もないのよ。」

稻子は顔が紅くなつた。二の句がつけなかつた。

「こゝは私の懇意な家ですから、遊びに來て、つい長くなつてしまつたんですけれど、少しも後暗いことはないんですからな。」

「私そんな意味ぢやございませんの。」稻子は氣拙くも思ひ腹も立て、

「だよね、正ちやんが、この家へ時々お出でになるこゝを、お父さまにお話したものですから……。」

「そしたらお父さんが何と云つたの。」

稻子は一寸躊躇したが、

「お父さんは大變御機嫌がお悪いんですの其れには私も責件がございますわ。こゝの御主人のこゝを、お母さんに伺つたこほり、私お父さんにお話致しました。」

「沼田さんのことですか。」辰子は眉根に八の字を寄せた。

「わ。」

「そんな事迄言つてくれなくても可いぢやないか。」辰子は不機嫌な尖つた聲で言つて、

「ぢやまあ色々私のこゝも言つたんでせう。」

「いゝわ、其他には別に何にも。」稻子は應へたが、母の言草に矛盾があるのを飽き足りなく思つた。若し後暗いこゝろがないならば、其位のこゝは話しても好いぢやなかつたと思つた。

「まあ可ござんす。私は是から御飯を頂いて歸りますから、貴女は私のこころに介意はないで、早く學校へ行つて下さいよ。」

「何」ミ、稻子は應へたが、これでは自分の親切が通らないのみか、却て母の反感を買つたやうに思はれて、不快で堪まらなかつた。然し何も正一のためだと思つて、黙つてゐた。

そこへ女がコーヒやお菓子をもつて來た。沼田の指圖なのである。稻子はそんな物を飲む氣もしなかつた。

「では失禮致します。」稻子は身體を浮しかけて言つた。

するに辰子は其れが又妙に氣にさはつたらしく、

「何ですな稲子さんは……折角コーヒが來たんだから一口ぐらゐ飲んで行つても可いでせう。其ちや何だか氣持が悪いぢやないか。」

「でも、私澤山なんですもの。」稻子は多分反抗の色を浮べて、

「それに學校も急ぎますから。」

「お氣の毒でしたね」ミ、辰子も紅い顔をして、

「其位なら正一を寄越してもらつても可かつたんです。」

「私さうも思ひましたけれど、男の正ちゃんに、こんなお使をさせては悪いと思ひましたから……。」

「へ、然うですかね。」辰子は又顔を紅くしたが、

「貴女は何か思ひ違ひをしてやしませんか。」

## 六

稻子も其まゝ黙つてはゐられなくなつた。

「何うしてですか。」

「だつて、正一が私を迎ひに來るのが、それ程悪いこころなんです。何がそんなに悪いんですか。辰子は大人氣もなく、喧嘩腰で訊いた。」

稻子は呆れたやうに、其顔を見てゐたが、  
『でもお母さん、正ちゃんは學生です。まだ年も行きませんから、物に感じ易い頭腦をしてゐるんです。』

『妙なことを言ふわね。』と、辰子は冷笑つて、

『其が何うしたと云ふんです。』

『此處は正ちゃんのやうな年の行かない人の、來る處ぢやないと思ひます。』

『へい、レストオランが……。』

『それも私等の親類と何か云ふのなら介意ひませんが、そんな親しい家でもないのに、お母さんが遊びにいらして、お泊りなすつたり何かしてゐる處を、正ちゃんが見たら、何と思ふでせうか。』稻子は言ふだけ言つた。

辰子は辱し怒りで眞赤になつた。

『ぢや何ですか、私が親類でもない西洋料理屋に泊つたのが悪いと云ふんですね。』

『私正ちゃんに、餘りこんな處を見せたくないと思ひますの。』

『然てですか。貴女はお醫者様のお嬢さまだけあてつ、随分堅苦しいことを仰しやるのね。』辰子は紅かつた顔が、少しづつ蒼くなつて來た。

稻子は父を侮辱されたやうな氣がして、押返して言つてやらうと思つたが、じつと我慢した。『そんな譯ぢやないんですわお母さん。私の言つたことがお氣にさはつたら、何ぞ御免下さいまし。』

『いゝね。貴方のやうな物の解つた方の云ふことが、氣になぞ障るものですか。ですけど、正一は私の子ですよ、貴女は正ちゃんの爲に善いとか悪いとか言つて、大變喧しく言ふけれど、私だつて正一の母ですもの、其位のことには知つてゐますよ。』

『それあ然うですわ。私別にそんな意味で言つたんぢやないんですわ。』

『貴女は料理屋が何うの憐うの言ひますけれど、さう馬鹿にしたものでもありませんよ、西洋料理だつて、何もそんなに下等な商賣ぢやないんですからね。これでも東京では指折の家な

んです。お客さまはみんな上流の方ばかりなんです。稻子さんは自分のお父さんばかり豪いやうに思つて、商人なんか輕蔑するけれど、田舎の汚い患者の手をもつよりか、此方がどんなにお上品だか知れやしない。」

稻子は極りが悪くて、顔もあがらなかつた。これ程物のわからない女を、妻や母にもつてる父や自分たちは情なかつた。

「稻子さんなどは、それあこんな商賣をしてゐる家と交際するのは辱のやうに思つてゐるんでせうけれど、正一は私の子ですから介意ひませんわ東京にも是こいふ親類もありませんから、是からあの子の事を私は沼田さんにお願しておかうと思つてゐるんです。」

「それはお母さんの自由ですけど、お父さんが何さ仰しやいますか。」稻子はおづ／＼言つたが少し聲を顔はせて。「それあお父さんは哀れな田舎醫者かも知れませんが、私や正一のために大切な親です、お母さんのためにも良人ぢやございせんか。」

「何然うですこも。貴女が言はなくこも知れた事です。」

する／＼其處へコック場から沼田がのそり／＼遣つて來たが、ボーイやコック、女給仕人が不思議な顔をして、こつちを見てゐた。

稻子はそれ／＼気がついて、取返しにならない可慚しいこゝをしたのを悔いたが、辰子もびつたり黙つてしまつた。



別  
れ

稲子はその日學課が果てからも、竹村を彼の學校へ訪問したりなどして、家へ歸つたのは五時頃であつた。實は母の辰子が家へ歸るにしても、あの調子では自分の非を悔ひて謝罪るやうなことがあらうとは思へないし、父は父で怒つてゐるから、急度何か紛擾が起るに違ひないと思像した。それを傍觀するのも辛いし、その場に居合せるこなれば、調停の勞をも取らければならぬ。又繼しいなかの自分がるては、反つて母の感情を募らせるこごがないこも限らないので、歸途ちよつこ竹村を訪ねたのである。

竹村はこの六月には學校を出るので、卒業論文の準備のため、この頃圖書室に入つてゐるこごが多かつた。稲子もそれを知つてゐて、家庭の問題などで、彼の頭腦を亂すのは餘り好いこごも思はなかつたが、外に話をする人もないので、些こ逢ひたいなと思つた。

圖書館の入口にある應接室のやうな小さい別室で、二人はあれ以來の顔を合した。  
「何うしました。」彼は先刻から書物を調べてゐて、可也頭腦が疲れてゐたので、沈鬱な目容をして出て來た。

「お忙しくて？」稲子は訊いた。

「いや、實はもう歸らうと思つてゐるこごで……」

「さう、では少し待つてゐても可いわ。」

「何が急に用？」

「父が上京しましたの。」

「へ、お父さんが……。」

「それでね、お母さんが家にゐなかつたでせう。一昨日出たつきり……。」

「また？ぢや新橋だね。」竹村は眉を擧めた。

「ね、然うなのよ」こ、稲子も顔を曇らせて「それで私困るから、父に秘密で今朝ちよつここ

さわ亭へ行つてみたの。」稻子はさう言つてその時の様子を掻撮んで話した。

「ちよいとお待ちなさい。」竹村は途中制めて、

「ここにかく僕も一緒に歸りますから、ちよいと此處に待つて下さい。何だか事件が打ばじまりさうだね。」

「ぬ、さうなの。」

竹村は急いで圖書室へ引込して行つたが、少時するにノートや参老書の一冊つまたつ鞆を提出して来て、

「どうもお待遠さま？」と一緒の外へ出た。

「然しちよつと面白くなつて来たぢやないか。先生も待切れなくなつて出て来たんでせうからこの際いつそお母さんの行動を暴露して、何にか根本的の解決をつけた方が可いんだかね。」竹村は赤煉瓦の建物の建続いた道を校門の方へ歩きながら言つた。

稻子は何とも答へなかつた。竹村の言ふことに絶對的反對する意志はなかつたが、父母が夫

婦別れでもするやうなこゝになつては、正一が可哀さうだ云ふ氣が、始終頭腦にあるのであつた。

「これから家へ歸れば、父母は屹度何か揉めてゐるに違いないんですわ。私もそれを聞くのが厭でならないの。」

「それも然うだが、貴女としては十分お母さんに好意を表してゐるのに、それを悪く思うまいふのは不都合ぢやないか。」

「それあ然うですけれど……」

「そんな旋毛の曲つた人だもの、貴女のこゝを先生へ何といつて話すか知れたものぢやない。これから一緒に行つてみやうぢありませんか。」

「然うね。」

家へ歸るに、正一ももう疾に學校から歸つて、茶の間の方へゐたし、父と母の辰子とは座敷の方で何か話してゐる處であつた。

「只今！」稲子は父母の前へ出て挨拶して、其まゝそこを離れた。

「御上京になつたことを、稲子さんから今ちよつと聞いたものですから早速やつて來ました。」  
竹村もさう言つて、渡瀬に一別以來の挨拶をすると同事に、辰子にも一寸お辭儀をした。

渡瀬老學士は難しげな顔をして辰子と差向つて坐つてゐたが、卒業論文のことなごで、竹村と話を爲初めたところで、いくらか機嫌が直つて、夫から夫へと醫學上の話が續いた。すると汐を見て、そこを離れた辰子は、二日振で歸つて來た家に、何の親しみをも感じない風で……其上先刻から渡瀬の詰問を受けて頭腦が空々したと云ふ風で、不愉快な顔をして長火鉢の傍に坐つて、決から責を出して喫してゐた。そして其の様子が、何うでも太腐れた形なので、稲子は可成接近しないやうにしてゐたが、「今朝ほどは失禮いたしました」と、それだけの挨拶は窃としない譯に行かなかつた。

「どうも御苦勞までした。辰子も不機嫌な顔をして應へた。

するうちもう六時近くになつたので、稲子が氣を揉んで、晩飯の支度について母に相談すると、辰子は、「さうね」と言つたきり、氣のない顔をしてゐたが、「お父さんに伺つたら可いのでせう」こゝ、素氣もなく言ふのであつた。

で、稲子は其の事を父に訊くと、父は又不機嫌な顔をして、「然ういふことはお母さんに訊なさい」と言つて、目鏡ごしに目を光らせた。

稲子は家のなかで散々離々になつたやうな悲哀を感じた。折角父が偶に出來たのに、衆の心に、こんな風な空虚のできてゐるのが、堪らないほど厭であつた。そして其も母一人の心の置き處から來たこゝだと思つて、怨めしくも腹立しくもあつたが、隅の方に消然してゐる正一の姿を見るに、また無上に可憐しくもあつて、自然に涙が泌出して來た。

「おい／＼」こゝ、父がその時座敷から甲高な聲で呼ぶので、稲子が急いで入口に顔を出すに、「家で何にも出來んやうなら、已は竹村ミ外へ出て食つて來ても可いぞ。女が二人もゐて何を

「ごたごたしてゐるんだ。」父は辰子に聞けよがしに大聲で言つた。性來至つて素直な男で、荒い聲などつひぞ立てた。このない父ではあつたが、今日はよく／＼腹に据わかねたところがあるらしかつた。

「そんな譯ぢやないんですけれど、私歸りが遅くなつたものですから……。」

「お前は學生の身分だ。不斷はこにかく、慙う云ふ場合に、臺所をやるのはお母さんの役目ぢやないか。」

「それあ然うですけれど、お母さんも今お歸りになつたばかりのやうですから。」稻子は庇護ふやうに言つた。

「稻、お前も御母さんと一つ腹だな。」父は興奮の色を帯びて、嵩にかゝつたやうに「お前もお母さんが、家を外に遊びあるいてゐるのを好いことだと思つてゐるのだな。」

「然うぢやございませぬけれど……。」と、稻子は父の憤怒の飛沫が、思ひもかけず自分の方に浴せかゝつて來るのをじつと我慢して逆らはないやうにしてゐた。

。然うでなければ、何故お母さんの居所を突止めて、早く連れて歸らんのだ。辰は今し方漸と歸つたばかりぢやないか。

稻子は終に、ほろ／＼涙をこぼした。

「然し先生！」竹竹は見るに見かねて、少し顫聲で言つた。

「それあ無理です。」

### 三

竹村の緊張した一聲に、渡瀬は急に此方に向いて、彼の顔を凝視した。

「何が無理だい。」

「無理ですとも」と、竹村は叱られても反抗せずにはゐられなれないといふ覺悟を示して、

「先生が稱子さんをお責めになる理由は少しもないと、僕は思ひます。」

「ほう、然うかい。」渡瀬は敢て稱子を責める氣はなかつたので、少し狼狽へた形で、

『だが、私は稲子ばかりを責めてゐるのではないよ大體、私が上京しても、辰子が家にゐないといふのが不都合だ。』

『然しそれは稲子さんの罪ではありません。』

『誰もそれを稲子の罪だとは言んよ。だが、たとひ腹から出たものでなくとも、母子なら母子らしく、何故もつと打解けて、晩飯の支度なり何なり、家庭を面白く愉快にせんかといふのだよ。』

『御尤です。(竹村も同感にたへない云ふ表情で、

『それは先生と御同様、僕も切に希望するところですが、然し事實は然う行かんです。』

『何故行がんのかい。』渡瀬は自信のない聲を反問した。

『先生は其の理由を御存じないですか。』

『私の不徳からだとも謂ふのかい。』

『いや、然うぢやありません。』竹村は寧ろ氣毒になつて、それ以上言ふ氣がしなかつたが、然

し其儘黙つてゐることは、尙更出来なかつた。で、彼は暫く言つらさうに悶へた果に、漸と思切つて言つた。

『こんな事を申上げると、先生はお腹立かも知れませんが、言はないではゐられをいのです。』

『それは聴かう。言つてくれ。』渡瀬は胡麻塩の口髭を揉みながら、いくらかおぎ／＼した調子で言つた。

『小母さんにはお氣毒ですが、憊うなれば何もかも言つてしまひます。』と、竹村は…液を吞下して、

『大體小母さんが家をおあけになるのは、今度に限つたことぢやないんです。』

竹村はさう言つて、稲子の方を見たが、彼女はそんな事を言はれては大變ださ云ふ風で、胸をはらく／＼させてゐた。

『ぢや、始終のこゝだと言ふのかい。』

『勿論です、御退院後、稲子さんや正一君と一緒にゐられたのは、眞の數へるほさしかないで

せう。無論病院通ひもなさつたでせう。又久振でお出になつたのだから、東京御見物も止むを得んでせう、しかも小母さんの入つしやる處は、決して新橋の常盤亭なのです。無論お泊りになつたことも、今度で二三回はあるやうです。それに小母さんは、田舎へ歸るのを大變厭がつてお在のやうです。恐く現在の生活に御不満なのは、今度に始まつたこゝではなからうと思ひます。それも東京に育つた小母さんとしては、無理のないこゝかも知れません。然し稻子さんや正一さんと云ふ立派なお子さんのある人の母なり妻なりとしては、甚だ不謹慎だと思ふのです。忌憚なく言へば、小母さんの態度は甚だ氣儘だとも謂へるでせう。』竹村は疊みかけて言つた。

『ほう、あれの氣儘を君は今知つたか。』渡瀬は爲うこゝなし笑つてゐた。

『それも可いんですが、親類でも何でも無い、西洋料理などへ入浸になつて、いや今日は芝居明日は函嶺といふ風に、さきわ亭の主人と一緒に遊んでお歩きになつたり、お泊りになつたりするのは、既業に氣儘が放縱とか云ふ程度を取越して、先生の體面を傷けると同時に、貞操

を疑はれても爲方がないと思ひます。』

『貞操ぢや!』と、渡瀬は眉をぴりぴりさせて、

『何かさう云ふ事實があるか。』

#### 四

『然し先生』と、竹村は一層興奮の色を帯びて、

『今申し上げたのは悉く事實です。』

『それは解つてゐる。』渡瀬は笑ふやうな聲で語るやうな、妙に筋肉の痙攣つた顔をして、

『それは解つてゐるが、貞操問題といふこゝになつて來るこゝ、是は重大問題だ。君は少し言ひ過はせんか云ふのぢや。』

『若し言過ぎだつたら、幾重にもお宥しを願いますが……。』と竹村は湧き立つやうな感情を出来るだけ壓へつけるやうにして、

「然し小母さんの此頃の御行爲については、貞操問題にまで立入つてお話をしても、左程不當ではないと信じます。子供の家にゐないで、他人の家……而も先方は獨身者で……」と、竹村はちよつと言淀んで、

「先生、何うかお許し下さい、僕は露骨に正直に申上げなければなりません。小母さんが何等かの理由で、素とあのときわ亭にお在になつたと云ふことも、殆んど公然の秘密でございますのみならず、小母さんのお話では、主人はその頃コツクをしてゐた男だといふぢやありませんか。」

「おい〜」と、渡瀬は急に苦い顔をして、

「そんな事は、君さして口にするべき事ぢやなからう。少し反省しなさい。」と窘めた。

「はッ」と、竹村は爲うこころなし、ちよつと首を垂れた。

すると其時、今までしん——してゐる茶の間から、急に辰子が口を出した。

「コツクをしてゐたつて、何をしてゐたつて、餘計なお世話ぢやありませんか。」

「いや……」と竹村は襖の蔭から、そつちを振向くやうにして、

「僕はコツクをしてゐた事を悪く言ふのぢやありません。貴女が其時分から、ときわ亭の主人と御懇意だつたといふことを申すのです。其は小母さんも御自分で仰やつた。です。」

「言ひました。私は沼田を知つてゐます。其だから往つたり來たりもするぢやありませんか。私は他に親類らしい親類もない體ですからね。」

「それは判つてゐます。然しさう仰やるに、僕は小母さんにお伺ひしなければなりません。貴女は御退院後の御自身の爲すつていらしやる事に就いて、少しも後暗いことはないと仰やられますか。」

「憚りながらそんな事を、貴方に聞かれるやうな悪いことをした覺はありませんよ。」辰子は蔭で白笑ひをした。

「まあ皆で澤山私の悪口を言ふが可いんです。貴方がたは私を逐出さうにでもしてゐるんでせうよ。貴方なぞに逐出されなくとも、出てよければ私から出て行きます。貴方がたは、不斷か

ら寄つて集つて、私を輕蔑しきつてゐるぢやありませんか。私だつて、何もゐたくてゐるんぢやありません。行かゝり上「正一」に引かれて、十五年もあの山のなかに辛抱して來たんです。偶に東京へ出て來て、少しばかり遊んだから言つて、さう喧しく言はれたんぢや、眞個遣切れやしない。ふん、馬鹿々々しいつたら有りやしない。」

竹村は惘れ返つた。云ふ風で、口をゆがめて苦笑したきり辭を返す勇氣もなかつた。

「竹村も言過ぎる。然し辰子、お前もちと鼻ツ柱がちこ強過ぎやせんかい。お里が知れて見つともないぞ。」渡瀬は笑ひながら言つた。

「何うせ私のお里なんか、碌なものぢやないんです。皆さん御存じの通りなんですから。お上品ぶつたつて爲方がありやしない。」辰子は空嘘いてゐた。

「こら！」と、渡瀬は少し聲を勵まして、

「私に向つて何を云ふのか。」

「貴方に云つてゐるんぢやありません。」

「誰に云ふにしても、其の棄てくされた口の利き方は何だ。それだから、竹村が今のやうに攻撃もするぢやないか。竹村の云ふことにも一理があるぞ。」渡瀬は嚴かな怒聲でびしやりと遣込めた。

## 五

渡瀬の一言に、辰子はびたりと黙つてしまつたが、同時に四邊がしんと白け返つて、後から來る大きな暴風雨を豫想するかのやうであつた。

「辰子、お前にも訊いて見なければならん。そこでは話もできん。此處へ出なさい、渡瀬は言つたが、辰子は有繁に怯氣ついて、一寸出て來る様子もなかつた。

すると渡瀬は一層苛々して、

「辰子、お前は今竹村の言つたことに就いて、立派に辯解ができるか何うか。言つて見なさい」  
「……」



「竹村はお前の貞操を疑ふと言ふのだ。お前に後暗い處があると言つてゐるではないか。お前に辯解があれば左に右、無いミなれば、其儘に捨ててもおけない。何うだ、言ふことがあるなら言つてごらん」

「私別に申すこともありません。辰子はやつぱり長火鉢の傍から」

「それは泊つて来たのは悪いか知れませんが、何う言ふものか私と稻子さんとは気が合はないので家にも何だか面白くないんです。自然昔馴染の沼田が、彼の店の主に据つてゐて、私に遊びに来い〜と言つてくれるものですから……行けばつい話が長くなつて、心安だてに泊つてくるやうな事になるのです。後暗いことがあるか無いか、そんなことは沼田にお聞きなすつて戴けば分ることです。』

「それが不謹慎だと言ふのだ。私は此間から手紙で何と言つてよこした？」

「それも知つてゐますけれど、何分體がまだ十分でないものですから、少しでも長く病院へ通ひたいと思つて……」

「體の十分でないものが、何だつて沼田などと一緒に芝居へ行つたり、函嶺へ泊りに行つたりしたのだ。それでは、病院通ひは表面の口實で、沼田と遊んでゐたいがために、田舎へ歸るのが延引になつてゐるのだと云はれても、云譯がないではないか。お前は田舎へ歸るのが厭になつたのだらう。」

「……………」

一體沼田などと交際をするといふことが、お前の不眞面目な何よりの證據だ。今は一軒の料理店の主人か何か知らんが、高がコック上りの商賣人ではないか。たとひ立派な紳士になつてゐるにしても、お前が自分の身分を考へたら、恥しくて、昔馴染だの何だのと云つて、公然にある店へ顔を出せた…ではないでないか。そんな心掛で、これから先子供家庭教育ができると思ふか。……おい辰、黙つてゐては分らん、茲へ来て皆の前で何と云つてみなさい。』

「ですけれど、沼田さんだつて昔の馴染を思へばこそ、私にも親戚同様交際してくれ、子供のことも不及ながら心配しやうと言つてくれるんです。たとひコック上にせと何にせよ、人間

に異りはないんですから、あの人と交際つたゝめに、子供の教育ができないなんてこともないぢやありませんか。」

辰子はさう言つて長火鉢の側を離れて、座敷の入口へ姿を現した。

「沼田がお前と親類附合をしたいと言ふのか。」

「まあ。そんな事も言つてゐるんです。」

辰子は澄した顔で應へて。入口に坐つてゐる竹村の前を通らうとしたとき、何うしたはずみでか、帯の間からちらちらと白い光を放つて、疊の上へ轉りおちた物があつた。それは先刻内へ入るとき、ふと心づいて、指から抜いて、帯の間へ入れておいた白金の指環であつた。辰子ははつと思つて、それを拾はうとするに、指環は其まゝ轉つて、渡瀬の坐つてゐる蒲團の直ぐ傍で止つた。

## 六

無論渡瀬は其を拾ひあけないではゐなかつた。そして其高貴の光に驚異の目を睜りながら、其の出所を考へないではゐられなかつた。

渡瀬は指環を摘みあけて、

「これは何かい」ミ、辰子の顔を見た。そして、

「おやそんな物……」ミ、辰子がいきなり手を出して取らうとすると、ちよつと指環をもつた手を引込めて、

「これはお前のかい。」

「いゝね。」辰子は白を切つたが、困惑の色が曇つた目のうちに隠せなかつた。

「お前が落したぢやないか。」渡瀬はさう言つて仔細に指環を眺めてゐるが、

「これは大變なものぢやないか。何うしてこんな物をもつてゐるのかい。」

「それはね」こ、辰子は狼狽へた調子で、

「そんな賣物があつたから、買ふ買はぬは別として貴方にお見せしやうと思つて……。」

「賣物だ。ここから出た賣物だ。」

渡瀬は目を丸くした。

「沼田さんの知つてゐる人で、飽きたから賣りたいと云ふ人があるんですの。」

「私にこんな物を買ふ餘裕があると思つてゐるのかい。ダイヤ一粒だけでも大した物ぢやないか。一體いくらに賣らうと云ふのだ。」

「さあ、幾許とも聞きませんでした……多分千圓ぐらゐるものでせう。」

「千圓？それは其位はしやう！」渡瀬は吐いたが、其は其として辰子の言ふことを、正面から信ずることができないやうな氣がしたので、

「で、お前は是を私に見せて、何うしやうと云ふ積りなのかい。私の家庭に成金風でも吹かさうと云ふ了簡かい。」

「然うぢやないんですけれど、沼田さんが持つて行つて見たらと言ひますから……。」

「だが、何うも可笑いな。」渡瀬は指環を彼女の顔を見比べてゐたが、

「して此金目の品を、お前は何と思つて預かつて來たのだ。しかも帶の間なぞへ入れて、是が家のなかだから可いやうなものゝ外で落したとしたら、其こそ大變ではないか。」

「だから、私ちよつと自分の指に差して來たんですけれど……。」

「まるで子供のやうな話だ。その一時でもお前がいかにか解るぢやないか。稻子がそんな事したらお前は何と言ふか、それが一家の主婦たるものゝ心掛だなと思ふのかい。お前は衆から輕蔑されるといつて怒るが是では輕蔑されても爲方がないではないか。背酷のやうだが、お前の不檢束にも呆れるではないか。」

辰子は黙つて聞いてゐるが、恥辱と怒りで顔が火のやうに熱して來た。皆の前で、そんなに云はれたのが怨めしかつた。もう何うでも可いと思ふ氣がして來た。

「高が指環一つで、そんなに喧しく云はれちや、私も遣切れない。」辰子は獨語のやうに云つ

た。

「何んだと云ふのかい。」

「いゝね、此方の話ですよ。」

「高が指環一つは、何んのことかい」

「だつて然うぢやありませんか。」

辰子はむしやくしやするやうに蒼い顔をして、

「こんな物の一つや二つ、何時でも與れる人もあるんですからね。貰つた云つては濟まないから、預かり物だ云ひましたけれど、眞實は沼田から貰つたんです。さきわのお神さんの片身にして、私が貰つて來たんです」

「其なら其で、何故早くさう云はんか。」

「だつて、冒頭からそんな事を云つた日には、唯さへ疑ぐられてゐる私ですから、何を云はれるか知れやしません。」

七

渡瀬は其から何か學術上の研究でもするやうな氣むづかしげな態度で、その指環をくれるにつけ貫ふに就けての双方の氣持や、前後の事情について夫から夫へ追窮するので、不斷から偏屈な彼の氣質を知つてゐる辰子も、終に業を煮すと同時に、氣分が滅茶々に搔亂されて返辭がしどろもぎろになつて來た。

「お前の云ふことは、少しも要領を得てをらんぢやないか。」渡瀬は子供の前で、餘り彼女を窘め辱めるのが残酷だと氣がついて、少し穩な調子で笑ひながら云つた。

「いゝ然うですとも。指環一つくれるたつて貰ふたつて、誰もそんな難しいことを考へる者はありやしませんからね。」辰子は目に涙を溜めながらも冷笑つて、

「こんな物が澤山あつて、誰も箱めるものがないから、氣に入つたのをお持ちなさい。ではせひませうと云ふので、一つ取つて來たよけのこみですわ。」

『けれども大した縁も可縁もないものが……而もお前は瘦せても枯れても、一軒の主婦だ。それが指環を以て受けるといふについては、其相當の理由がなくてはならん。先が何の意味もなしに、そんな高價なものを濫とくれる氣遣もない。何か其間に深い理由がなくてはならん。渡瀬はもう自分にも煩いと思ひつゝも、やつぱり同じやうなことを繰返さずにはゐられなかつた。

あゝつ！』と辰子は腹の底から出るやうな溜息を吐いた。そして、眉根に深い八の字を寄せ

て、私そんな面倒くさいことは大嫌ひです。そんな事を訊かれると頭痛がして來ます。指環を以てつて悪ければ、皆さんで何うとも好いやうにして下さい。』

『その處置をするについて、訊いてゐるのだ。それがお前には解らんのか。』

『解りませんとも。私は頭腦が悪いです。それで悪けりや離縁をするとも何うとも、御勝手になさいまし。指環一つのために、一生言はれるより、其方がどんなに好いか知れやしな

い。

渡瀬はじつと彼女を見て、暫く口も利けずゐるたが、良久あつて、失望的な聲で、

『お前はそれを望むのか。』

『望むも望まないも、然うでもして戴くより外はないぢやありませんか。』

『お前は離縁をしろと言ふのだな。』

『まあ然うです。』と、辰子はさすがに顫聲で言つて、

『私一人のために、皆さんも面白くないでせうから、是を幸ひにお暇を戴きます。其の方が兩好しですわ。』

それがお前の希望だね。渡瀬は駄目を押したが、その聲は徒らに空虚に響くだけであつた。すると其時まで、じつと聞いて二人の争ひを一言一句も聞洩すまいと、熱心に耳を聳てゐるた

竹村が、遽に

『先生……』と呼けかた。

渡瀬は其の方を見た。

「私はまさか結果が、こんなことにならうとは想像しませんでした。私は先生にも小母さんにも濟まないことを申したやうです。竹村は心苦しげに言つた。

「いや、此事は君と交渉のないことだ。私と辰子との間の感情問題だ。で、私は君達は何も思ふか知らんが、慫うなつた以上は爲方がない、斷然たる處置を取るつもりだ。」渡瀬は嚴かに言つたが、聲の調子が淀んでゐた。

「はッ」ミ、竹村は恐縮したやうに云つたが、

「先生の御立腹は御尤もですが、如何でせう……？」

「いや〜。」ミ渡瀬は自分の感情や理性を調攝することでもできなくなつた風で、

「君はまあ黙つてゐてくれ。私には私の決心がある。」

「は」ミ、竹村は微聲で云つた。

では辰、お前の勝手にせい。此上私は何にも言はんどぞ。」

## 去 歲

其はそれで可がつた

渡瀬は是迄辰子を妻にしたことについて、幾度悔いもし慚ぢもしたか知れなかつたが、然し二人の競争者に克つて初めて獲た戀だと思ふと、尙深い執着と矜とを感じない譯にいかかなかつた。で、この場合若し二人だけの差向ひであつたら彼は少しは良人の權威を失墜するくらゐのことは甘んじて、婉曲に而も利己的に、辰子と妥協するくらゐのことは、左程困難でもなかつたに違ひないのであつた、處か幸か不幸か、傍に竹村がゐて、無慚にも問題をすん〜危険な方角へ押詰めて行つた。無論彼にはそんな意地悪な考へはなかつた。辰子を弾劾するはしたものの、風雲が險惡になつくるミ、却て怯氣がついて、渡瀬夫婦に濟まないことをしたやうに感じた。そして出来ることなら、この場だけでも二人を調停しておきたいと思つて、口を出しか

けたのであつたが、結果は却つて先生を挑發することになつてしまつた。彼は其以上、手を着けるここの却つて不利益であるここのを覺つて、黙つてしまつた。

稻子はといふと、彼女は茶の室の次の四疊半へ入つて、正一と一緒に、わななく心を戦かせながら晩飯についての相談の結果が、飛んだ悲劇を惹起したことを情なく思つた。で、その事を父にも詫び、母にも謝罪まつて、圓滿に事をおさめてもらひたいと希望したが、父や母の権幕さいひ、竹村の試みやうこした調停が、一たまりもなく父に彈つけられたことなどを思ふと自分の出る幕ではないやうな氣がした。

で、やきもき氣を揉みながら、躊躇してゐるこゝ、父と母との争ひは全く其の局を結んで、母は四疊半へ来て、押入れを開けて、袋や靴を引くり返してゐた。もう恚皆決心したこゝ云ふ風であつた。

そんな物音が聞こゆるまで、家のなかには全く深い静寂に封ざされてしまつた。近所の話聲や遠い電車の響きが、時々聞けて來た、もう臘月も十日になつてゐたので、八時といつてもまだ

日が暮れて、間もないほゞであつた。

二十分も経つたらうかと思ふ時分に、辰子は漸く荷物を纏めたが、その間彼女も手際よく其事にのみ働いたとはいへないのは勿論であつた。たゞひ沼田が彼女に渡瀬と別れて、自分の方へ來ることを、あれ程に熱望し、彼女自身もそれが思つてもない幸福な運命だと思つてゐたにしても、こゝを出て行くとなれば、やつぱり氣持が好くなかつた。是迄の渡瀬の愛情ぶかい仕向を思ふにつけて、濟まないやうな氣もしたし、自分の爲てゐるこゝが、餘り薄情で可恐しいやうな感じもした。で、何かなし悲しくなつて、着物を袋へ入れながらも手を休めてじつと考へたりしてゐた。

「何を躊躇するんです？」

沼田がああ額の禿あがつた顔を出して、ぎろりこした目をして、自分を呼びかけてゐるやうに思へた。

「こんな好い機会に出會ひながら、未練がましく愚圖々々してゐるこゝ、貴女は大切な幸運を取

逃がして了ふ云ふことに、氣がつかないんですか』

沼田がさう言つて、笑つてゐるやうに見えた。

『私には財産もある。立派な商賣もある。東京の目貫に宏大な建物もある。私はまだ年が若い面白いことが是からまだ、澤山ある。私は二十年來醒めない戀を、今もそのまゝ胸にもつてゐる。總ての幸福は貴女の決心一つで自由になるではないか。』

沼田がまたさう云つて、彼女を誘惑してゐるのを感じた。

それを今日までの憂鬱な生活に比べると、まるで晝と夜のやうなものであつた。

『私何うでもこゝを出てしまはなければ！』辰子は堅く決心した

二

で愈出るこなるこ、

『彼女は一つ大切なことを忘れやうとしてゐるのに氣がついた。それは正一の事であつた。彼

を連れて行くか、置いて行くか云ふことであつた。

そして其には渡瀬は現在の父だ云ふ強味もあるし、稻子が弟に偽りのない愛情をもつてゐるこゝも明かなので、置いて行くのに心配はない。で、それが又正一の前途のために利益であるかも知れないのだが、一つはこの場の氣分のはづみで、何うしても置いて行かれないやうな氣がした。そんな事をして、彼だけは自分で成行を見たかつた。

けれど正一も、もはや八つ九つの子供ではなかつた。母の行爲の善悪邪正くらゐは辨へてゐるのだと思ふと、連れていつて、却つて双方の不利になるやうな場合がありはしないか、其も心配であつた。

するに其時、稻子は父に自分の罪を詫びるに共に、母のこゝとを取做すつもりで、座敷の方へ出て行つたので、残つた正一は涙に曇つた目を擧げて、惱しげに母の舉動を覗てゐた。

『正ちゃん！。辰子は微聲で呼んだ。

『御母さんは少し譯があつて家を出るこゝになりましたからね。お前も御母さんと一緒に行く



でせうね。』

正一は目に涙を一杯ためて、黙つてゐた。

『それとも、御母さんと一緒に出るのは厭なんですか。辰子は少し氣色ばんで、重ねて訊いた。』

『御母さん何處へ行くの？』正一は曇り聲で聞いた。

『何處へ行くとも分り明したことは未だ判らないだけれぎ、そんなことは正ちやんが心配しなくとも大丈夫なの。だからお前も一緒に行くでせうね。辰子は宥めるやうに、遠しく言つた。』

『御母さんが出るなら、僕も出ていゝけれぎ……』と、正一は悲しげに聲を落して、

『だけれど、僕御父さんに伺つて見た上でなくちや。』

『御父さんに訊くんだつて？そんな事は可いのよ。御母さんがお出と言つたら、黙つて附いて來れば其で可いの。辰子はやきもきした聲でさう言つて、更に調子を落して、

『それに行先が何處だらうと、そんな事は、少しも心配はないんです。御母さんだつて、何の

老へもなしに、濫正ちやんをつれて行かうといふんぢやないんですからね。其どころか、正ちやんの利を思へばこそ、こゝをお出なさいと言ふんですよ。』

『でも、僕は御父さんや姉さんに別れるのは厭です。』

『解らないね』と、辰子は一層困つて、

『ぢや正ちやんは何うしても厭だといふの。御母さん一人で出て行つても介意はないと云ふの。』

『御母さんは何處へ行くんです。』

『それと言つて上げたけれど、出る先へ立つて、そんな話もしてゐられないぢやないか。だから、何であらうと、好きな事があるから御母さんの言ふことをお聞きなさい。こゝを出さへすれば解るこゝなの。そして、然うなれば正ちやんだつて、今迄のやうな客つたれた風なんかさせておきませんよ。立派な家に住つてもゐられるし、自動車にも乗れるし、芝居も見られるしお旨いものは食べ傍題、お小遣は使い放題云ふんだから。そんな好きなことはないぢやない

か。『辰子は熱心に諭した。』

正一は母の行先を、薄々知らない譯ではなかつたが、其と同時に其が不道德だといふこともおほろけながら感づいてゐた。で、母にそんなことを言はるれば言はれるだけ、不思議に反抗心が募つて、

『そんな處へ一緒に行くものかい。』と云ふ氣がしたが、然し母と別れるのだと思ふとやつぱり悲しかつた。

『御母さんも、今迄どほり家にゐてくれないんですか。』正一は大分たつてから、屹になつて云つた。

『御母さんは何うして家を出るの。御父さんに許してもらふ譯にいかないんですか。』さう云はれて、辰子は左右つ返辭も出来ないで、深い溜息を吐いてゐた。

三

すると其時竹村の聲がして、

『正一さん、ちよつと此處まで』と呼ぶのが聞えた。

正一は、

『は』と應へて、母の傍を離れた。そして袂で涙を拭きながら、父の側へ行つた。

稻子は先刻から、父の前へ来て、自分の不束から、こんな問題を惹起して濟まない云つて詫びるに同時に、どうか母を赦してくれと取做してゐたのであつたが、慙うなると、渡瀬もおいそれと云つて、稻子の云ふことを取上げる譯に行かなかつた。それに生強ひ辰子を止立しては却つて彼女の我儘を勞らせて、高飛車に出られるであらうと云ふ不安もあつた。

で、今は正一の去就が、唯一つの問題として取残されてあるだけであつた。

『正一！』と、父は呼んだ。

「は？」と、正一はおどろ顔をあけて。

「御母さんは少し不都合なことがあつてな、今日限り家を出ることになつたのだ、で、御母さんは今直ぐにも出て行く様子だが、お前は何うする。御母さんを出しても、お前は家に残つてゐたいか、其とも御母さんと一緒に行きたいか。」

「ぬ」と、正一は惱しげに云つたが、腕で目を擦るきりで、分明した返辭もできなかつた。

「世間的の習慣から云へば、お前は男の子だから、父に就くのが當然のやうにも思はれるが、しかし近頃では、殊に私の氣持としては、それも一律に云ふことは出来ないかと思ふ。個人々々の事情もあらうし、本人の意志にもよることだ。お前は年が少いと云つても、もう十六にもなつてゐて見れば、何か自分でも相當の考へがあるだらうと思ふが、何うする積かい。御母さんと一緒に行く方が可いと思ふかい。」

「いゝぬ。正一は明白答へた。」

「残つて御父さんや姉さんと一緒に暮さうと思ふのかい。」

「は」と、正一は微聲で答へたが、涙がまたほろ／＼と頬を流れた。

「稲子も飲泣をしてゐた。」

父は頷いてゐる。

「それなら其で可いが、尙御母さんの考も聽いて見なければならん。御父さんは、御父さんの子として、何處までもお前を家におきたいのだ。御母さんは此處を出てから、何う身の振方をつける積か、それは御父さんの干渉する限でもないが、出て行かうと自分から云出すからには何か成算もあることであらうと思ふ。それで、お前が孰へついた方が幸福か、それは一寸判断もつきかねるが、あの丁箇では、御母さんに就いてゐては、まあ餘り面白いこともなからうかと思ふ。で、お前は此の際御母さんを諦めた方が利益だと思ふ。……何に、姉さんだつて、小さい時分御母さんに別れたんだから、お前は姉さんに比べれば年も行つてゐる。別に大した不幸も云ふでもなからう。殊にあの御母さんは然うだ。あれを置いては、お前たちの利にならんと思ふから、出てもらふことにしたので、お前が残つてゐるに云ふなら、其れくらの結構なこと

はない。渡瀬はさう云つて、更に稲子に辰子を呼んでくるやうに吩咐けた。

稲子はしほくし辰子る部屋へ行つた。そして入口に手を突いた。

「あの御父さんが……。」

「あ、さう。」

「御母さん済みませんでした」し、稲子は詫びた。

「私が悪うございました。」

辰子は何かこましくした化粧道具のやうなものを取纏めてゐたが、わざと落着いてゐた。

「なかに貴女が悪いつて云ふ譯ぢやないんですよ。みんな私が馬鹿だから起つたことなんですよ。」辰子はさう云つて、稲子の手をついてゐる直ぐ傍を通つて座敷の方へ出て行つた。そして直りしそこに坐つた。

#### 四

辰子のそこへ坐るのを待つて、渡瀬は不斷に變らない穩かな調子で、徐ろに云出した。

「それで、お前が出て行くについては、この正一の去就を決しなければならんが、今ちよつこ正一に訊いた處、父親の方へ就きたいと云ふことで、云ふまでもなく其は然うあるべきことだと思ふから、お前も其事に異存はあるまいと思ふが、如何かい。」

辰子は其の語の終るのを待兼ねるといふ風で、「實は今私もその話を、正一に爲て聽してゐた處なんです、あの子は私が連れて行かうと思ひますよ。」

「連れて行く？」

「正一は何うしても私がつれて行く積りですから、何うが然う思つて戴きたいんです。」

「けど、本人が行かないと云つたら、何うするね。實際また其が當然でもあるんだから。」

「當然だか何だか、そんな事は知りませんけれど、正一は連れて行かせて頂きます。」

「しかしお前の方で然う決めても正一が厭だといへば爲方があるまい。」渡瀬はさう云つて更に正一に

「正一、何うだ、お前は御母さんに就くか。」

「いゝね。」正一は聲は低い、しかし決心は堅さうであつた。

「それ御覽」ミ、渡瀬は微笑を浮べて、

「正一も、もう十六になつてをる。自分の意志もあらうから、何うだ希望どほりに任しておいたら。お前にも定めし立派な成算もあるこゝは思ふが、しかし父親がないとか、異うとかいふこゝは、本人の一生に取つては餘り幸福なことゝも思へない。」

「それは何うなりますか、私も別に深い考へがあつて、連れて行くんぢやありませんけれど、子供の一人の教育ぐらゐは、何うにかなるだらうと思ひます。」辰子はおこなしやかな口の利き方をしたが、正一にも同じことを繰返した。

「正一、貴方よく考へてね。今も私が云つたまほり、決して貴方のために悪いやうにはしませ

んからね、皆さんにお暇を戴いて、御母さん一所に来るんですよ。」

正一は甚く苦しさうに見わた。返辭もせず切なげに俛いてゐた。彼とても母に別れるのは、心細くないことはなかつた。然もそれよりも父や稻に別れて行くのは、一層寂しかつた。母には濟まないが、何うしても附いて行く氣には成れなかつた。その上姉の稻子だつて、幼い時分から母がないのだと思つた。母の無い同士の姉弟なら、それで通した方がいゝといふ氣がした。

「何うします、正ちゃん。」辰子は重ねて訊いた。

「僕家にゐたいんです。」正一は重苦しい調子で漸つて應へた。

「居るんですつて？」

「は。」

「ぢや然うおしなさい。」辰子は失望と不満の色を浮べながら言つた

「では、お前は家にゐるな。」父が念を推した。

「は。」

「それでは然ういふことにして、お前も正一のことを諦めてくれ。」渡瀬は辰子に言渡した。  
『そして正一のことには就ては、一切關係なしといふことにしてくれなくてはならん。』  
『よございます。』辰子は苛々した調子で、一子供のことですから、遠慮してあゝ言ふのだらう  
とは思ひます、けれど爲方ありません。正一は置いて行きますから、何うぞ何分よろしく。  
辰子は脆くも敗北した形で、さう言つて座を起つた。そして急いで支度をした。  
旋て辰子の吩咐で、正一は不承不承に俵を呼びに行つた。俵は直に來た。

## 五

荷物を俵に積んだり何かして、辰子が愈々お暇乞の挨拶をする迄には、ちよいと時間がかゝつた。

渡瀬は口ではあのやうに言つたものゝ、卒辰子が出て行くとなると、餘り好い氣持はしなかつた。出さずにはおけない理由があればこそ、こゝまで運んで來たのだとは思つても、それも

言ふだけ言つて了つた後では、然う大業に言立てるほどのことでもないやうな氣がした。しかし其も今となつては、もう後の祭だ云ふ氣がした。

稻子や竹村はさういふさ、父よりも今少し冷靜な頭腦を持つてゐた。父に於けるほゞ直接の問題でないだけに、見方にも餘裕があつた。辰子の性格、生立、趣味、目下の境遇から言つても、彼女は寧ろ解放さるべきものだと言ふ氣がした。そして彼女は今それを急ぎつゝあるのだと思はれた。沼田ミどんな契約がしてあるか知れないやうに考へられた。たゞ稻子は正一に濟まないやうな氣がしてならなかつた。強ち自分が主張して母を出す譯ではなく、又父から言出したことでもなくて、寧ろ辰子自身の意志から出たことではあつたが、それだけに尙正一のために氣毒のやうな氣がした。

一御母さんに正ちゃんから、も一度お願ひしてごらんなさいよ、ねね。『稻子は茶の室の隅で、私と正一に私語いだ。正一は母の荷物を立關へ持出しなどしてゐたが、彼とても母の此間からの舉動や、今夜の態度を、決つて善いとは思つてゐないので、少し腹立氣味で、母の手助けをしてゐた。』

竹村や稻子も、出て行く辰子の手助けでもあるまいと思つたが、黙つて坐つてもゐられないので、照隠しに少しばかり働いた。

「今後のことについては我々も心配しますよ。是限こいふ譯でもないでせうからね。」竹村は正一を慰めるやうな風で、其場の不愉快な気分を幾分緩和しやうと試みた。すると辰子は何かをわくわくした様子で、一刻も早く人々の視界から姿を消してしまひたいと思つて、其辭何こなし出て行きにくいやうな、不思議に臆病な氣持に襲はれながら、

「私が出て行つたら、さぞ皆さんはせい／＼するでせうよ」などゝ厭味を言つた。

それが又ひどく一同の氣を損じて、その爲に却て彼女を出してやるのが氣易くなつた。同時に辰子自身も、その乗白のために、出て行くきつかけが樂になつた。

「では私はお暇致します。」辰子は座敷へ來て、渡瀬にお辭儀をした。

「然うか。ではまあ一旦出てみるのも可からう。」

「いづれ荷物は、送つていただくか、人を受取に出すかするつもりですから、其節は何分よろ

しく。」

「その點はちつとも心配はない。私の方から荷造をして出してもよし、お前の方から取りに來てもよし」と、渡瀬は落着いた句調で言つたが、顔には絶望の色が包めなかつた。

「それで差當り、お前の落着く先は何處か、それだけ聽いておかう。一期半期の奉公人となつて、どんな又用事がないとも限らん。」

「それは然うどころぢやございません」と、辰子は目眩さうに渡瀬の顔を見たが、

「外に頼る處もありませんから、私淺草の叔母のミころへ參るつもりですの。」

「さうか。それだけ聞いておけば宜しい」

「では是で……。」

そして其處にづらりミ並んだ竹村や稻子もお辭儀をして、辰子は玄關へ出て行つた。

渡瀬も起つてそこまで見送つた。

襦袢が出てから、一同はさすがに憎々ミ玄關を去つたが、稻子と正一は四疊半の方へ行つた。

「何だか寂しくなつた。一つ酒でも飲まう。渡瀬は竹村に言つた。」

## 災 禍

こゝで話は二つに岐れるが、辰子の叔父の岩本の方から片着けて行くさしやうなら——

叔父の岩本が二里ばかりの山道を、俥に揺られて渡瀬の家へ乗込んだのはもうお晝近い頃であつたが、渡瀬はちやうど二三人の患者に接するため、診察室へ出てゐるところで、彼はその次の日本室へ案内されて、暫らく待つてゐた。

渡瀬は辰子に出て行かれて、生活が急に淋しくなつてゐた。彼は彼の時、失望し腹立ち悔恨の餘り、寂しい田舎の家へ歸る氣もなくなつて、昔書生をしてゐた時分に、友達と飲んでゐるいたやうな場所を捜しては懐かしい思ひに耽りつゝ、遺瀨のな 孤獨の鬱悶、晴らさうとしてゐた。その間田舎の女關は醫專出の若い一人の助手に任せきりであつたところから、患者は看々減つてしまつた。渡瀬は辰子なしには、面目がなくて、ちよつと田舎へは歸れないやうな



がしてゐた。

するうちお盆が来たので、彼は漸々行李を理めて歸途についたが同時に稻子や正一も學校が休暇期に入つたので、家をたゞんで、一緒に歸省することになつた。渡瀬は一人の子供も同行しないふこで、いくらか歸るにも張合があつた。

然し家へ歸れば歸つたで、彼はまた今迄経験しなかつた寂しさを感じた。辰子の人格や氣質については、彼も竹村や稻子以上に、その缺點に氣がついてゐたので、時とると彼女と綺麗に別れることができたなら、如何にか氣持が蕭洒するか知れない。さう考へることもあつたほどだが、今彼女の方から作つた動機によつて別れたとなると、矢張未練も愛着も残らない譯には行かなかつた。

彼は今迄は極めて勤勉で、そして又親切な好村醫として、近郷の病家から信頼されてゐたのであつたが、今は何かしら支へを失つてしまつたやうで、職務に勵む張合もないやうな風であつた。

で、辰子から度々催促をしてくる除籍のこころも、村役場へ極りがわるいと云ふやうな引込思案から氣にかゝりながらも、一日一日と延びてゐた。それもこの頃になつて漸く手續はすましたやうなものの、辰子の残して行つた衣裳の發送となると、尙一層の煩はしさと不快を感じたので、稻子に吩咐けて、ほんの不斷着のやうなものばかり取纏めて、鐵道便で送らせた。目星いものは其まゝに簞笥に收まつてゐた。

するこ此一週間ほど前から、正一が病氣をして床に就いた。渡瀬は正一の發病當時、家にゐなかつた。彼は時々町へ飲みに行くのが、この頃の切めてもの心遣になつてゐた。家がつまらなくなるこ、彼は俵を飛ばして、町へ出て行つた。町では料理屋が到る處にあつた。俱樂部や玉突のやうなものもあつた。彼はそんな處へ入り込んで行くのに、決して件侶に事缺ぐやうなことはなかつた。で、正一が四十度以上の熱を出して斃れたときも、彼の居所が判らなくて、稻子は一人で氣を揉みながら、八方へ人を出して漸とその所在を突止めたほどであつた。それ以來、彼は家に尻を落着けてゐた。

處へ辰子の叔父だといつて、岩本がやつて來たのであつた。  
四十分ばかり岩本を待たしてから、渡瀬は漸く座敷へ入つて來た。彼は苦い顔をして、座についた。

『早速ですが……』と、岩本は一つ二つ時候の挨拶などをしてから、直ぐ話を持出した。そしてくべらくべらく理窟ばつた口調で、要求の點を述べた。

渡瀬はそれに就いては、何の言分もなかつた。

「わゝと、それは無論お渡しはしますが、全部いふ譯にも行かないので、實は本人が直接來てくれると、好都合なのだ……。渡瀬は元氣のない調子で言つた。

二

それは其れで済んだが、然し辰子の籍をぬいたり、荷物の受渡しをして、悉皆關係が絶つて了ふ迄には、些時日がかゝつた。

作者は今、辰子が出てからの渡瀬一家の運命——殊に許婚であつた竹村流二と辰子の關係

係が、辰子の離縁問題に影響された渡瀬老ドクトルの痛ましい心の波動を受けて、思ひもかけない悲劇に陥つて行く経路へ入る前に、その序幕として、辰子が籍や荷物のこゝで、わざと田舎へ出向いて行つた時のことを、煩雜に流れない範圍で、少しばかり語つておかなければならない。

辰子が沼田と一緒に、渡瀬の村のちよつと手前の、〇市へ着いたのは七月の中頃で、その高原地もまだ暑い盛であつた。

無論辰子たちは二人きりではなかつた。少しは法律上の智識……云つても其れは眞の警察で刑事をしてゐた経験があるといふ程度の男ではあつたが、左に右些は目の開いた人間を一人連れて行つたのであつた。そして其れは口入稼業などをしてゐる淺草の叔母の二度目の良人であつた。この…母の身のうへは此の話しに關係がないから、ここには省くとして素人の奉公人の周旋屋でないこゝは勿論であつた。

そして、そんな者をつれて行つたには、別に理由もあつた。こゝいふのは、辰子がいかに圖々

しくても渡瀬の村へ入つて行く勇氣がなかつたのは言ふまでもなかつたが、辰子の手紙で言つてやつた講求に應じて、渡瀬家から送つて来た荷物が、思ひのほか不足であつたので、その事について一ト論判しなければならぬ云ふ考へがあつたからである。

勿論辰子も沼田も、初めからそんな物に目をくれる氣はなかつた。離縁状さへ取れば、裸でも一向差支はないのであつた。それに二掉の辰子の衣裳箆筒には、それほど惜いと思ふほどのものもなかつた。

『そんな物は思ひ切つて了つた方がいゝ。』沼田は言つてゐた。

しかしお于渉すぎで、その上慾の皮の突張つた淺草の伯母夫婦はそれを聞いて惜しがつた。物を惜しがるよりも、取るべき物を取らないのは、法律上の智識のない間拔の爲るこゝか何ぞのやうに思はれた。

『己が行つて話をつけやう。何に譯はない。伯父は言つた。』

『辰子はいきなり沼田のこゝろへ落着くこともできないので、稻子たちの家を出るこゝ、先づこゝ

の伯母夫婦のこゝろへ足を留めたのであつたが、伯母も辰子が東京で暮すこゝには賛成であつた。

三人は〇市から自働車で二十分ばかりの距離にある山の温泉場に宿を取つて、二三日遊んでゐた。こゝは辰子も、田舎にゐた時には、二三度遊びに来たこゝろであつたが温泉宿も多いし夏場は土地の人より、東京の客が多いので、知つた人に逢う心配も少なかつた。

で、伯父は或日、到頭渡瀬の家へ出向いて行つた。彼は四十を二つ三つ越してゐたが、てつぷり肥つた、下卑た顔の男で、その上頭髪が後から禿てゐた。で、大きい口に金齒を光らせて兵兒帯に太い金鎖など絡ませ、バナマを冠つてゐた。彼は品物の目録を懐にして、俵で出て行つた。それが朝の十時頃のこゝろであつた。

辰子たちは旅館の別館に陳取つて、札びらを切つてゐたのであつたが、避暑旅行のつもりで、そんな品には深い執着もなかつたが、この頃の渡瀬家の様子を知らりたい云ふ好奇心がないでもなかつた。して辰子は暑中休暇で歸つてゐる筈の、正一が何うして暮してゐるかなこゝ、獨

りで思ひ暮してゐた。

三

ところで岩本は渡瀬に會つて首尾よく荷物を受取ることはなつたが、歸りに薬局生と衝突をしてしまつた。それは眞の一寸とした小闘合ではあつたが、何時か頭惱が興奮して來て、人間に對する正常な理解のない若本が口汚く罵るに、助手兼薬局も怒り出して、岩本や辰子の人身攻撃をまで遣初めた。

「話なら話のやうに、穩かにするが可い。こここの玄關へ強請に來やしめいし、寄越すべき物を抑留して寄越さないから、それでわざ／＼東京から旅費をつかつて、遣つて來たんだ、餘り人を輕蔑してもらうまいよ。岩本はそんな調子で顔に太い筋を立てて惡體を吐いた。若い助手も負けてはゐなかつた。

「だがね、荷物を受取るに渡すに云ふことは、それは普通の離縁の場合に言へることだ

す。一體なら荷物の請求なんかされた義理でもなければ、應ずる理由もないんぢやありませんか。それに、のこ／＼その使に來る家の先生が温順し過ぎるから、あの女が増長してこんな結果にもなつたのだ。」

「それぢや全然お話にも何にもならんぢやないか。助手は冷笑つて、

「左に右ここは玄關先ですから、餘り聲を出されては外聞が悪い。さうぞ早くお出になつて下さい。貴方のやうな野蠻な人間が、親類だなどいふことが知れるに、坊ちやんが可哀さうです。其でなくてさへ、坊ちやんは随分肩身が狭いんです。殊に今は病氣ですからこんな問題を耳に入れるのは慘酷です。さあ、さうぞ其方へ……。」

そして助手は薬局の扉口に立はだかつてゐる彼を、手で押出さうとした。

この場合、岩本が出かけに飲んで來た酒の酔がまだ醒めてゐなかつたのは勿論であるが、ちよつと柔道の手などのあつた處から、押出されて其まま引込んでゐられなかつた。彼は「何をするんだ！」と助手の手首をしつかり取つて押へると同時に、軽く下へ引落したところ

で、助手は床の上へべつたり突伏してしまつた。

然し彼はそのまま怯んではゐなかつた。起き上るに同時に、

「何を亂暴をする！」と、いきなり胸倉を取つて力を究めて壁際へ押つけた。

争闘がしばらく續いた。無論岩本の方が強くて、助手は可成の苦戦であつた。そして膝に組敷かれたり、椅子の上に捻伏せられたりした。幸ひなここには、裏の烟へ出てゐた爺やと屈強の小作が二人、荷を作りあけて運び出さうとしてゐた運送屋も、知らせを聞いて集まつて來たので、岩本も拳や薪雜棒で、さんざ向脛や頬脛をしたゝか喰はされて、這々の體で外へ逃出してしまつた、彼等は辰子の叔父が來てゐて暴れだしたと聞いて皆んな寄つて集つて、辰子の代りに彼を取占めて腹癒せをしやうと云ふ意氣込で、取かゝつたのであつた。

岩本はやがて村人の冷笑を浴びつゝ、俾を急がせて其處を去つたが、頬骨や太い頸のあたりに瘤が幾箇もなく腫れあがつてゐた。太腕も蚯蚓腫にはれてゐたし、脛の骨もすきく痛んだ。

「畜生覺めてゐやがれ！」彼は口のうちに口惜しさうに彼等を呪ひながら、痛みをおさへて温泉場へ引返して來た。

旅館では沼田は晝寢をしてゐた辰子はその傍に女中のお信を相手に何やら話をしてゐたが、歸つて來た岩本の蒼白めた顔を見て、驚きの目を睜つた。

「何うしたの？其の顔は！」

「どうも慙うもない。彼双ら酷い奴等だ。多勢寄つて集つて、己を痛い目に逢はせあがつた。」

岩本は瘤だらけの顔を擧めながら言つた。

#### 四

「まあ！」と、辰子も眉に八字を寄せた。

岩本はそれから二日ばかり遊んでゐて、辰子や沼田に先立つて、この温泉場をおりて行つたか、渡瀬の犯罪を密告するか否かは別として、ここにかく〇町でちよつと警察に舊友を訪ねて、

それから東京へ歸るのだと言つて、立つて行つた。

辰子も長くここに居る氣もしなかつたが、岩本から聞いたところでは、正一の疴氣が餘り輕くはなささうなので、ひどく氣にかかつて來た。渡瀬がついてゐるんだし、弟思ひの稻子もゐる。ここだから、まさか間違ひもあるまいとは思つたが、でも矢張氣にかゝつた。切めて岩本が穩かに荷物を引取つて來てくれたら、少しくらの面の皮が厚いといはれても、正一に一目でも逢つて行きたいとも思つたがそれも出來なかつた。

で、お信を東京へつれて行かうと思つて、本人に勸めると、お信も心が動いて、何うかつれて行つて下さいと言つて、ひどく氣乗がして來たので、更めて宿の主人にそのことを話すと、お信の遠い縁家になつてゐる彼も、それには格別異存もなかつた。で、お信は一旦自分の家へ歸つて、親や兄の許しを得て、荷物をもつて來るここになつてゐた。

辰子たちはお信が來次第、ここを立つ積にしてゐた。するこ或朝沼田が何氣なしに、楊枝を喰へながら、廊下の椅子に腰かけながら土地の新聞を

見てゐると、三面のところ、初號活字で『〇〇製糸工場の墮胎罪!』と云ふ大見出しに、渡瀬學士に嫌疑あり』と云ふ小見出しで、お信の流産の天末が、麗々しく長々と書立てられてあつた。

『やあ、やつたな!』沼田は思はず叫んだ。

すると其時鏡臺の前に立膝をして、鬚を撫でつけてゐた辰子が喫驚して、こつちを振顧いた。

『何うしたんです。』

『岩本さんが到頭密告したさみりて代診と一緒に到頭渡瀬さんは擧げられたぜ。』

『まあ!』辰子はさすがに顔を顰めた。

『尤も渡瀬さんは、今のところ單に犯罪の嫌疑があるさ云ふだけで代診が免狀をもつた一人前の醫者である以上、渡瀬さんは責任はないのだから、罪になるやうなこゝもあるまいが、何しろ氣毒なこゝをしてしまつた。』

「たとひ罪にならないでも、醫師も人氣商賣ですからね、それが裁判沙汰になるこ、立關の寂れになつてしまひますからね。それに代診のしたことは、まるつきり自分にも責任がないとは言へないんださうですよ。岩本の小父もさう言つてゐましたから。」

何にしても、不名譽は不名譽だ」沼田は尙もその記事に目を通しながら、

「は、あ、〇町の刑事が探知して、告發したと書いてあるな。岩本さんがやつたに相違ない。私があれ程言つておいたのに……私たちは、何もあの人たちに怨みがある譯ぢやないんだからね。」

「それあ然うですこも。」

「まだ豫審中だから、渡瀬さんも申譯が立つて赦されるかも知れないが、左に右お氣の毒のこ」

辰子も新聞を取つて、一ト通り目を通したが、餘り好い氣持がしなかつた。岩本を荷物受取にやつたこころを、今更後悔せずにはゐられなかつた。

・午後にお信が歸つて來た。

正一の肋膜は漸次快方に嚮ひ八月末には既に病床を離れたが、然し衰弱はまだ全く癒ひなかつた。それに幼い時分にも、一度肺炎に罹つたことなどがあつたので、今度も病後の養生が大切だと云ふところから、どこか海岸へ一月ばかりも遣つておかう云ふことで、父がつれて上京するこゝになつた。

渡瀬は代診の墮胎事件は、その時迄には只だ一回の公判があつたばかりで、彼が其の犯罪には全く關係のない云ふことだけは法廷でも認められたやうなので、多少安心はしたやうなものゝ、事件が全く落着を告げたといふ譯ではなかつたうへに、世間では渡瀬に多少の疑ひを抱く者もあつたり、渡瀬の潔白を信じながら、感情上彼に好意を持つこゝろがでなくなつた若もあつて、その事件が裁判にかかつてからは、立關が日に／＼淋れて來た。辰子に出て行かれた

事だけでも、彼としては殆ど堪へがたい打撃であつたのに、引續いてそんな問題が発生したのて、彼は憤慨する氣力もなくて、ひどく失望落膽して、憂愁と懊惱に日を暮した。

で、彼はこの際切めて好い辯護士でも頼んで、少しでも代診の罪を軽くすると同時に、自分の名譽をも維持したい云ふ考へから、正一をつれ旁再び上京して來たのであつた。

稻子も學校は卒業したことは言ひ條、まだ東京にゐて勉強したいこゝろもあつたし、友達にも逢ひたいので、正一は自分が連れて行きたいと思つてゐた。何よりも彼の女はこの六月の卒業試験を失敗つた竹村の身のうへが氣にかゝつてゐた。

竹村は、辰子が渡瀬と夫婦別をした、あの當時自分が眞先に立つて、辰子を彈劾したこゝろを後でいくらか後悔するやうな氣分になつてゐた。實を言ふと、早晚夫婦別れの悲劇は發生するものとは考へてゐたので、自分としては唯少しそれを迅めたに過ぎないと云ふ氣がしてゐたが而もそれ以來、渡瀬は彼に對して餘り好い感じをもたないやうであつた。辰子が家を出たに於いては、いくらか彼を怨んでゐるやうな口吻をさへ洩らすのであつた。竹村はそれを心苦しく



思つた。そして其の彌みと同時にそれまでは熱心に勉強しつゝあつた、卒業論文の調べなども興味を失つて、自然氣乗がしなくなつたのみならず、彼はまた外界の事情からも、論文の材料調べを、放棄しなければならなかつた。彼はその頃、悪性の脚氣に罹つたのであつた。

竹村の卒業が、こゝで又一年延びたと云ふこゝも、今の渡瀬に取つては可也の打撃であつた。

竹村は其一夏を、渡瀬と同じく懊惱のうちに過した。彼は正一が病氣をしてゐた時分、一度自分の村へ歸つて、正一をも見舞つたのであつたが、今は房州の海岸へ行つてゐた。

渡瀬は正一を轉地させるのに何處といふ當もなかつたので、差當り竹村の行つてゐる海岸へつれて行くつもりで、東京へ着くとすぐ、兩國から北條行の汽車に乗つた。

竹村は北條の海岸に近い、或旅館にゐたが、渡瀬が着いた時には、彼ほステーションまで迎へに出てゐた。正一の來るこゝは豫て電報で報告されてゐたからであつた。

それがもう九月の半過ぎで、町や海には夏中込合つた避暑客の影も見なくなり、松原にも濱にも冷々した初秋の風が吹いてゐた。それに其日は時間ももう晩かつたので、薄い夕日を浴たした海岸の町が、殊に蕭條として寂しかつた。

渡瀬と竹村とは、夏以來の久闊を叙しながら、多くもない荷物を手分して提けてステーションから三町ばかりの距離にある旅館まで歩いた。

二

旅館に着いても、別にこれと云ふ話もなかつた。ただ暫く逢はないうちに——と言つても、つひ此夏田舎で幾度も逢つたのだが——渡瀬が滅切年を取つたことが、竹村の目に立つた。

でちやうど晩飯の時分だったので、久し振で三人は食事を供にしなが、田舎に於ける墮胎事件の裁判の模様なきについて、渡瀬はほつ／＼話してゐたが、東京から辯護士を連れて行くこゝにして、諸誰が可からうかと云ふやうな相談もあつた。然しその事については、竹村も別

にこれぞと思ふ心當りもなかつた。

「何にしても、飛んだこみをやつてくれたものだ。お蔭で私は痛くもない腹を探られて、村の評判は悪くなる、小数の同情者はあつても、憐うなると唯お氣の毒だと口に言ふだけで、何の頼りにもならん。實に困つたことになつてしまつたよ。」

渡瀬はちびく酒を飲みながら、愚運を零した。

竹村は慰めるに辭がなかつた。

「そこへ持て来て、正一は體がわるい。君は卒業が一年延びるといつた譯で、私も今年ぐらゐ凶い年はない。渡瀬は沼息を吐いた。

竹村は黙つて俛いてゐるが、彼としても渡瀬に對しては、多少の不足もないことはなかつた。近來渡瀬から受取る學資の少いことなごは其一つであつた。それも辰子の意志にも因ることと思はれたが、この六月脚氣に罹つて卒業試験が駄目になつた前後などは、竹村は殊に金に困つてゐた。渡瀬にも色々物入や心配が續いてゐるので、それを請求することもできないで、彼は

自分の家から金を取寄せたりしてゐた。

『しかし、これと云ふのも夫人——正一さんには悪いけれご——沼田や何かに挑てられて、あの女が先生の思に報ふに仇を以てすると云ふやうなことをしたからです。岩本といふ夫人の叔父さんが田代君(代診の名)を摘發したと云ふに至つては、實に不都合極まるぢやりませんか。』

竹村は腹立しさうに言つて、

『どこ迄あの人達は、先生の家へ祟らうと云ふんですか。僕は實に憎いと思ひます。』

『だがまあ辰子のことは、私も餘り口にしたくはないよ。彼女の性質は私も知つてゐるし、傍のものから教唆されたといふ事情もあらうから、深く咎めん方が可いよ。』

渡瀬は正一の前を憚つてか、辰子を辯解するやうな氣持で言つた。

『そのうちには又故悛して謝罪つて來ないものとも限らんのだよ。』

竹村は憫れたやうな顔をしてゐた

それから正一は飯をすまずと睡氣を催して來たので女中に吩咐けて隣の部屋へ床を延べさせ

て、臥してもらつた。彼は顔にまだ血食も出なかつたし、食も進まなかつた。そして伺處が深い憂愁に閉されてゐた。母のことから、一家が急に暗い運命に陥ちたやうに思はれて、始終それが頭腦に蔽被さつてゐた。悪い母だとは思つても、血を引いただけにやつぱり懐かしいやうな氣が、時々してゐたと同時に、そんな母をもつた自分が、ひどく肩身が狭いやうに思はれた。

今も、正一食事をしながら二人の話を無關心では聞いてゐられなかつた。で、床についてからも、其事を思ひつづけて、獨でほろ／＼涙を流してゐた。

正一が寢てからも渡瀬と竹村とはまだ何やらひそ／＼話をしてゐるが、それは渡瀬の家の財政上の話で、この頃は餘り樂でもないと言ふやうな渡瀬の口吻であつた。

其うち正一と同じ部屋に二つ並べて布いた臥床へ入つて、彼等も枕に就いたが、竹村は今の渡瀬の話について、何となし不安を感じてゐたので、容易に寢つかれさうにもなかつた。

正一も波の音が耳について、うとうとするかと思ふと目ざめると云ふ風であつた。

三

翌日渡瀬と竹村とが正一をつれて、海岸を散歩してゐた時のこと、渡瀬が妻の辰子が出て行つてから、とかく家が面白く行かないと云ふことを言出して、愚痴をこぼした。で、二人は、病氣保養に來た肝腎の正一を其方退けにして、辰子の離縁當時に遡つて愚痴を言つたり、自分を主張したりしてゐるが、竹村は十分渡瀬の氣持は理解してゐながらも、いつまでも其に拘泥つてゐる彼の心弱さ未練さが不快であつたばかりでなく、くどくど女々しい彼の言草が煩くなつて來た。

『ぢや先生は、小母さんが續いて家にゐて下さりさへすれば、先生の家が今のやうな不幸には陥らなかつたとお思ひですか。』竹村は少し興奮の色を浮べて反問した。

『いや、強ち然ういふわけぢやないがな』と、渡瀬はさう言はれると又然うだと斷言も爲かねて、少し狼狽へた語調で打消した。

「ただ私の云ふのは、慙う云ふ場合に、あんな者でもゐてくれると、多少力にもならうし、正一の體のことについて、私の手が省けるだけでも、大助かりだといふまでだよ。氣を悪くしては困る。」

「僕が氣を悪くする理由もないですが、僕はもつと根本的のこころを考へてゐるつもりだつたんです。」

「根本的といふこ。」

「僕など若いものが、先生にこんなこころを言ふは僭越かも知れませんが、あの小母さんは先生の御家庭に取つては、それほど惜しい人ではなかつたと思ひます。寧ろその反對で、あの小母さんがあるために、村に於ける先生の人望は、少くとも半分以上も失はれてゐたと思ふくらゐです。それにあの人は、總ての事に随分不檢束な方だつたから經濟上から言つても無駄な浪費が可也嵩んでゐたやうですからね。」

「それは私も認めてゐるよ。」渡瀬も興奮の色を帯びて、

「しかし其もあの女としては己むを得んこころだよ。あれは田舎育ちの村の者等こちがつて、東京に産れて東京に育つてゐるから、稚い時分から都會趣味といふものを解してゐる。従つて日常の生活にも村の人達と折合ひかねる處のあるのは、言ふまでもない事だよ。強ちまたそれが悪いとも言へないので、その點は大目に見てやらなければならんよ。」

「さう言ふ風に言つてしまへば、其は然うかも知れませんが、左に右あの人は、自分や家庭のことについて、餘り眞面目な考をもつてゐられなかつたことは、先年もお解りの筈です。あの時先生がお取あけになつた指環などについても、小母さんは随分先生を踏つけにしたこころを爲すつてをつたこ考へるんです。小母さんの先生に對する氣持は、あれで以て十分解る筈だこ、僕は信じてゐます。所詮は、あの小母さんが出て行かれたことは先生の日常に取つては一寸御不便のやうには思へませんが、ただ其れだけのことで、その小さな御不便も外のことです十分補ひがつくと思ふのです。」竹村は熱心に言つた。

「いや、それはな」と、渡瀬はその道理には服しながらも、やつぱり心から然う考へることは

出来ないと言ふ風で、「それは君等若いものから見れば、然うも思はれやうが、人の家庭と云ふものは、なか／＼然う單純にはいかないものだよ。」渡瀬はさう言て空虚な笑ひ方をした。

#### 四

然しそんな事はいくら言つても際限がないのに、傍ではらく／＼して正一にも極りがわるいやうに思はれたところで、二人はやがて口を噤みあつて、宿へ歸つて來た。

それがもう十時半頃で、彼此してゐると、直に十二時になつた。渡瀬は晝飯をすますと、間もなくこゝを立つたが、停車場でまた財政上の愚痴などを、竹村は聽かされて、うんざりした。

『この際のことだから、まあ出来るだけ一つ儉約にやつてくれたまへ。そのうちには、稻子も一度東京へ出たいと言つてゐるから、事件の目鼻がつき次第よこすことにならうかと思ふ。』渡瀬は汽車を待つあいだ、そんな事を話してゐるが、その口吻によると、竹村は何だか月々の

ものを貰ふのも氣兼ねのやうな氣がした。實際また竹村は、不足分を始終兄の方から取り寄せてゐたのであつた。

渡瀬を送つてから、竹村は正一と一緒にその邊を散歩したが、正一も何だか萎れてゐたし、竹村自身も不愉快であつた。辰子の出て行つたことが、大半自分の所爲でもあるやうに、渡瀬が思つゝるやうなので、厭でたまらなかつた。

『先生も大分愚痴つほくなつたね。』竹村は北條の町はづれの縣道を歩きながら、正一に言ひかけた。

正一は淋しい頬に微笑を浮べてゐた。

『先生は小母さんがゐなくなつたので、悉皆力を落してしまつたんだね。』竹村は嘆息するやうに言つて、

『正ちゃんは何う思ふ、あの御母さんがゐた方がいゝか、居ない方がいゝか。』

正一は困惑の色を浮べた。彼とても母のゐなくなつた事は、餘り好い氣持ではなかつた。心

から愛敬する事のできない母ではあつたし、帯京中の彼女の不檢束な舉動も目撃してゐるの  
で、不知不識彼女に對する反感も嫌悪もあつたので、出て行くときには左程にも思はなかつた  
が、日がたつに從つて其等の厭な感じは段々薄らいで、時にはひどく懐かしく思はれるのであ  
つた。一つは病氣で氣が弱くなつてゐる爲でもあつた。

二人は八幡の森のなかへ來てゐるのに氣がついた、街道筋はじりくくと残暑の光熱が、まだ  
襟や肩に焦けつくやうであつたが、こゝは松の老木が生茂つてゐるので、薄ら寒いほどの涼し  
さであつた。

竹村は何だかひどく氣が減入つて來た。いかに辰子に未練があるとしても、あゝまで女々し  
い愚...をならべなくとも可かりさうなものだと云ふ氣がした。

「正一君の御母さんたる人を、悪く言つたのは僕が悪かつた！」竹村は八幡の神社の境内で、  
松の根方に腰がけながら、頭を押へて溜息をついた。

正一は吃驚したやうに、その顔を眺めたが、何といつて慰めていゝか解らなかつた。で、た

だ譯もなく悲しくなつて、目を曇ませて顔を背向けてゐた。

すると爾時、今までは何の氣もつかずゐるのだが、一人の若い女が、お宮の石段をおりて  
くるのが目についた。

それは十九か二十ぐらゐるの東京風の身装をした女で、セルの單衣に紫紺かゝつた金紗お召の  
羽織を着て、縫取のある黒いバラソルをさして、素足に草履をはいてゐた。様子がちよいと小  
意氣にみわた。

正一は何の氣もなしに、顔を背向けてゐるが、竹村は「おや」と思つて目を款てた。それは  
單にこの寂しい境内を背景にしてゐるがために目に立つたばかりでなく、何處か見覚えのある  
女のやうに思はれたからであつた。

それは彼と同じ村のお信であつた。

## 稚馴染

お信と云ふ其の女が、竹村と同じ村のものであることは、前にもお信が辰子に話した通りだが、小さい時分には小學校も同じであつたばかりでなく、家が近かつたので、お信の兄と竹村とは中學時代までは仲の好い友達であつたところから、始終往來もしてゐたし、お信とも一緒に秋は山へ栗を拾ひに行つたこともあれば、冬は炬燵に入つて加留多を取つたこともあつた。今でこそお信の家は零落れて了つたけれど、その時分は小作などを使つて相當に暮してゐたのであつた。

竹村は歸省ごとに、この少女が一年一年美しい娘になつて行くのを見て、何となく懐かしい思ひを唆られるのであつたが、お信の方も、ふと途中で出逢つたりなどと、顔を眞紅にして通りすぎてしまふのであつた、お互に世帯事などをして遊んだ稚い時のことを憶出すと、飛

しいやうな氣がして碌々口も利けないのであつた。其のお信が工場などへ入る事になつたと知つて、竹村は餘り好い氣持はしなかつたが、今度の事件の當人が其のお信であると聞いた時には、一層厭な氣持がしたのであつた。

竹村は一目見ると、よく似た女だとは思つたが、まさかお信がこんな處へ來てるやうとは思はれないので、よく似た女もあるものだ、不思議さうに彼女の近づくのを睨と眺めてゐた。すると其が最初の印象にたがはず、やつぱり同じ村のあのお信であつた。で、お信の方もこんな處に竹村があるとは夢にも思はないので、べら／＼した着物を引張つてつるん／＼と草履ばきの足を引摺りながら側へやつて來たが、その時ふとそれが稚い時分からの馴染であつた竹村らしいと氣がつくと螺旋仕掛の人形のやうに、びたりと足が止まつた。

二人の視線がびつたり合つた。

「あらあなたは竹村の欽二さんぢやありませんかね。」お信は心持顔を紅くして訊いた。  
「やつぱりお信さんだつたんだね。」

「わ、私信ですがね。まあ不思議なところでお目にかゝるものですわね。」お信はさう言つて側へ寄つて来た。

「僕も先刻から、能く似た人が来ると思つて見てゐた處だ。」

「この坊ちゃんとは」と、お信は正一の顔を眺めたが、それが渡瀬の子供だといふことが、直ぐ判つたので、あの事件をでも思ひ出したらしく、極り悪さうに目を伏せた。

「何うしてこんな處へ来てゐるんだい」竹村は訊いた。

「私かね」と、お信はやつぱり極りの悪さうな顔をあけて、田舎訛のある言葉で、

「私はこの頃東京へ来てをりますんでね、御主人のお伴で二三日前こつちへ来ましたよ。貴方は……。」

「僕かね。僕は病氣のために、此處へ来てゐるんだ。」

「この坊ちゃんもですかい。」

「坊ちゃんも病氣をしたので、保養に来てゐるんだがね、してお信さんは東京のどんな處にゐるんだね。」

お信はちよいと返辭に行詰つた彼の女は辰子や沼田に連れられて東京へ出る事になつて、出發する先へ立つて裁判所から呼び出されたために、後に残ることになつたが、それから二度も二度も喚出され、第一回の公判にも出たのであつたが、もう出る必要もなくなつたので、今度愈沼田の方へやつて来たのであつた。

こゝへ来たのも、沼田と辰子のお伴であつたが、それも彼の女の健康がすぐれないために、店へ出て働く前に、少し養生をした方がいと云ふ辰子の取計らひからであつた。

今日は沼田が東京へ歸つて、辰子は按摩などを取つて寝てゐるので、その間にお信はそこら一人で運動してゐるのであつた。

竹村もお信も大きくなつてからは、村で逢つても親しい話をするといふこともなかつたの



で、今こゝで逢つたと言つても、格別話のはづむ理由もなかつたが、色氣も羞恥さもなかつた、無邪氣な子供の時分のことを臆出すと、何だか可笑しいやうな氣がした。お信はお信で、この人が渡瀬の令嬢の稻子さんのお婚さんになるのかと思ふと、何だか氣窮りのやうな氣がして、自由に口も利けなかつたが、竹村も一緒に世帯事などして遊んだお信坊が、こんなに大きくなつて、しかも子供まで産んだ―流産にしても―のかと思ふと、何だか妙な氣がして、ぢろく顔を見るばかりであつた。

「歛二さんはもう學士にお成んなさつたんですかね」お信は訊いだ。

「いや、未で」と、竹村は苦笑して、

「お信さんの東京の奉公先云ふのは、どんな家なんだね。」

「私の奉公先ですか」と、お信はちよつと考へるやうな風をしたが、何うも其だけは明せないやうな氣がしたので、

「さあ何處ですかね」と、笑つてゐた。

こゝで竹村はあの裁判のこゝをお…から訊いて見やうかとも思つたが、極を悪がらせるのの悪いと思つて其は言はなかつた。ただ村にもゐられないので東京へ出て來たのであらうと、窺に想像してゐた。

「貴方はまだ暫くこちらにお出ですか」今度はお信の方から訊ねた。

「さうね。當分居るつもりだけれど、大分長くなるので、實は飽々して了つたのさ。」

「坊ちゃんは？」

「坊ちゃんも學校があるから、體さへ好くなれば一日も早く東京へ行かなければならんのだがね。それに此頃は御母さんがゐなくなつてしまつたからね。」

「然うですか」とお信は暗い目をして、氣の毒さうに正一の様子を眺めてゐたが、

「ぢやお寂しいわね。」

「あの御母さんも、正一君といふこんな大きな子供があるのに、自分から離縁されなければならぬやうな事をしたくらゐだから、正一だつて、別にさう悲しいとも思つてやしない筈だけ

れど、やればり然うも行かないのさ。」

『それは然うだわ。母子ですものね』と、お信はまた哀れむやうに正一を眺めて、  
『貴方御母さんに逢ひたくないですか。』

正一は淋しく笑つた。

『逢ひたいでせう。』

『いゝね』と、正一は涙ぐんだ目を伏せて、微かに應へた。

『わたし貴方のお宿へ行つても可ございますか。』お信は少し顔を紅くして訊いた。

『は、どうぞ』と、竹村は應へたが、餘り來てほしくはないと思つた。

『どうだ正ちゃん、そろそろ歸らうか。竹村は歩出した。』

お信も少し離れて歩き出したが、それつきり別に話もなかつた。ただ時々村の人の噂なきが途絶わがちに出るだけであつた。お信は始絡何だか物足りないやうな、氣はづかしい様な氣がしてゐながらも、竹村が素氣のない表情で、さつさと歩いて行くに、逆も親み近く隙がないや

うに思はれた。

やがて彼等は海岸に近い竹村の宿の方へ入つて行く小路の角まで來た。

『では此處で失敬しやう。』竹村はお信を振顧つて言つた。

『あなたのお宿は此方ですの』と、お信は本意なげに言つたが、一寸立寄つて行きたいやうな風であつた。

竹村はそれに氣がつかぬではなかつたが、わざと其處で別れた。

三

その日はそれで別れてしまつたとして竹村はお信のこゝみについて、別に何等のこゝみをも深く感じなかつた。たゞ一つ村に育つて、子供の時分からこのこゝみを能く知つてゐるだけに、いくらか果敢ないやうな、悲しいやうな氣持が残つたといふのであつた。

それよりも昨日からの渡瀬の言葉が、ひどく氣になつてゐた、無理もないことだとは思つて

も、まだ年の若い自分を掴まへて、あんな愚痴を言ふのは、餘りに年效のないことだといふ反感も、辰子に執着をもつてゐる未練さが、男らしくもないといふ輕蔑の念を押へるこゝろができなかった。

『そんなに此の僕を怨むなら、己は一切御免を蒙らうあの家を繼ぐこゝろも稻子と結婚することも！』

竹村は考へれば考へるほゞ腹立しくなつて、つひそんな氣持も起るのであつた。しかしそんな事をしては、稻子も可哀さうだし、渡瀬にしても、力を落さずにはゐられまい云ふ感じがした。あれはあア云ふ愚痴っぽい性質で……それも色々の災難が一時に來たので、殊にも自信力が薄く氣が弱くなつて來たからで、善意に解釋すれば自分にでも愚痴をこぼすより外、誰に話す云ふ人もないからだと思へば寧ろ氣毒だと云ふ氣もした。

竹村は然う云ふ風に、出来るだけ寛容な氣持で、渡瀬の今の境過を痛はしく思つたが、然しそれは自分自身いふものを遠く離れて強いて渡瀬を加護ふやうな氣持でさう考へる後から、

やつぱり又感が頭を擡げて來て爲方がなかつた。

翌日は力め、その事を忘れやうと思つて、讀書に頭腦を浸してみたが、何だか氣分がごちやくして、落着かなかつた。それには又、まだ一年學校をやらなければならぬと云ふ、もごかしい氣持も交つてゐたし、その一年間、渡瀬から學資を送つてもらはなければならぬことも考へてみれば可也厭なこゝろであつた。

すると不思議なこゝろには、お信などのこゝろを別に念頭においてゐる積はないやうでありながら、何だか昨日途中で逢つたときの、あの女の様子が、氣にかゝり出して來た。それは眞の微な一寸したことではあつたが、よく考へてみると、何だかそれに意味があるやうに思へてならなかつた。いや、單に昨日のみに限らず、そんなやうな場合は、これ迄にも度々あつたやうにさへ思はれる。彼が村へ歸省し、ふと彼女に逢つた場合などの事を憶ひ出すと、こちらは無意識で看過した事も、色々取合せて考へてみるこゝろ、おの表情や舉動に、既に然ういふ事があつたのではないかと思はれる。

「然ういふ事とは！」竹村は自分の心に聞いて見た。

「解り切つた事ぢやないか。」竹村はまた自分の心でさう思つて見た。

いや、それよりもつゝ不思議なのは、そんな感情が、世帯事として遊んでゐた子供の時分から、双方の胸に泌出してゐたかも知れないと云ふことであつた。實際男の子と女の子の仲の好いと云ふことには、多少ともそんな感情が芽を吹いてゐたからではないか。

それに、今思ひ出してみても、お信は子供の時分から美しい娘であつた。切長な大きな目は透徹るやうで、唇の薄手にできた口元に、不思議に少年の心を魅する仇氣なさがあつた。色も白かつた。髪もふさ／＼して濃かつた。そして其の面影は今も残つてゐて……寧ろ年々とも其の美しさは生長して、ひどく仇つほい女になつた。稻子は言ふまでもなく美しいに違ひない。上品でもある。教養もある。しかし其とは又異つた意味で、お信にも、誰がみても心を惹きつけられずにはゐられない美しさがある。

四

或日竹村は又正一と海岸へ出て行つた。

海岸までは其でも三四町田圃中の道を歩かなければならなかつた。で、二人は芋畑や稻田のなかを通り、踏切を渡つて、一叢の松林のなかにある砂地の小徑を歩いて、濱へ出て行つた。海には何處か底冷のするやうな風が吹いて、寂しいながらに、九月の日光が水にきら／＼光つてゐた。ちやうど漁師たちが男女集まつて地曳を曳いてゐる處なので、二人は何と云ふことになし其の方へ近づいて行つた。その邊にはまだ海水浴をやつて、眞黒の濱の子もおつた。で、二人でそこに立つて、地曳網の引揚げられるのを待つてゐると、その時浪打際の渚を歩いてゐる二人の女の姿が目についた。一人はもう卅五六の女らしいが、派手作りで、薄色のセルにほつ／＼水玉の模様のある金紗の單衣羽織をはをつて、美しい縫取のある黒のバラソルに日を避けてゐた。今一人はずつと年が若くて、これは洒落た縞柄の銘仙の單衣に幅の狭い綠色